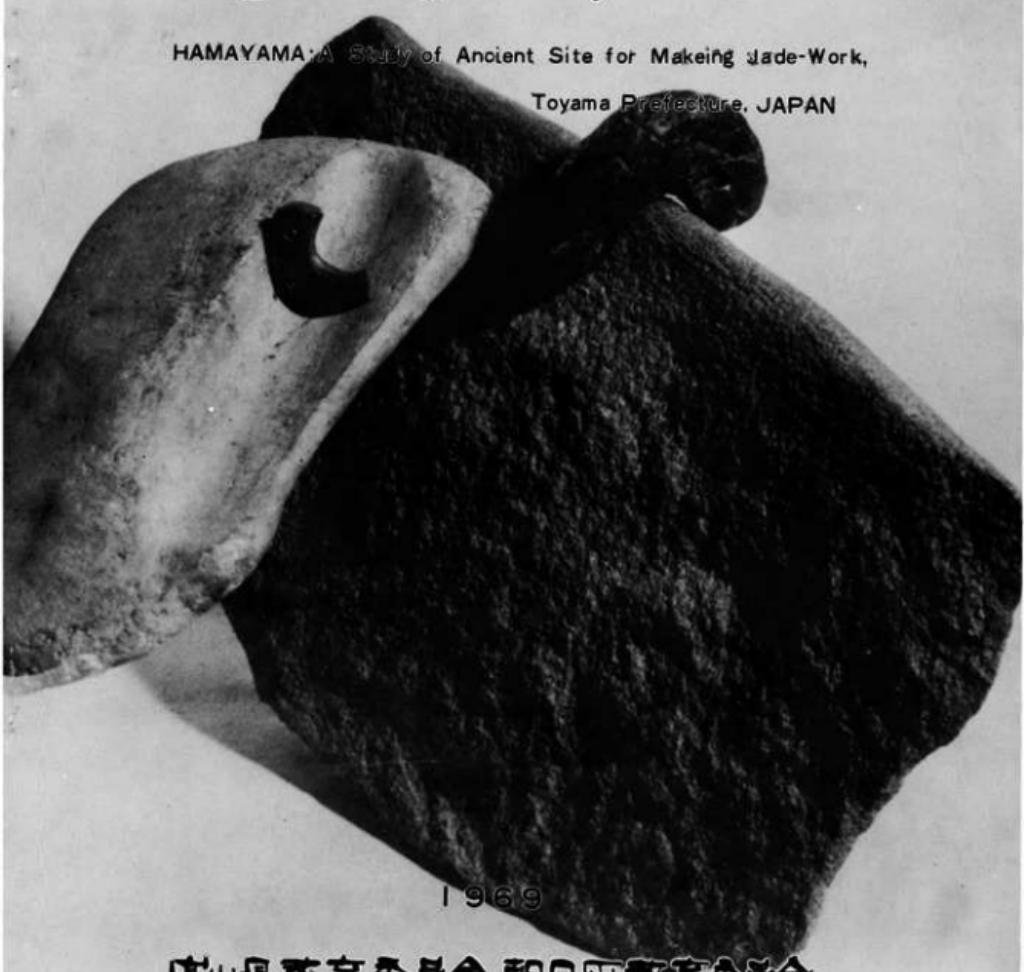


勾玉の故郷

はまやま

HAMAYAMA: A Study of Ancient Site for Making Jade-Work,

Toyama Prefecture, JAPAN



1969

富山県教育委員会 朝日町教育委員会



塩谷第2次調査団長

## 浜山遺跡調査団

### 第1次調査

團長 大場 義雄…国学院大学教授  
 副團長 渡 晴…富山考古学会長  
 団長補佐 考古学調査主任 寺村 光晴…和洋女子大学助教授  
 調査委員 福山 林継…国学院大学助手  
 " 安藤 孝一…国学院大学大学院  
 " 林 夫門…高岡高等学校教諭  
 " 竹内 俊一…宮崎小学校教諭  
 " 小島 俊彰…高岡工芸高等学校教諭  
 地学調査主任 藤井 昭二…富山大学助教授  
 調査委員 森 群平…朝日町文化財調査委員長  
 " 大田 弘…横山小学校校長  
 調査員(考古) 田島明人, 駒宮史朗, 鹿熊多香子  
     …国学院大学生  
 " (記録映画) 水島琴四郎…泊中学校教諭  
 " (印刷) 殿村 忠正…宮崎小学校教諭  
 " (写真) 清原 炳芳…清原スタジオ店主  
 " (補助員管理) 大平 一衛…宮崎小学校教諭  
 补助員 宮崎小学校児童

事務局長	小川弥一	朝日町教育長
次長	藤田儀宏	朝日町教育委員会総務課長
局員	野村久四	朝日町教育委員会社会教保係長
"	折谷 要	朝日町教育委員会主事

### 第2次調査

顧問 大場 義雄…国学院大学教授  
 " 渡 晴…富山考古学会長  
 团長 塩谷 敏幸…富山県教育長  
 副團長 中川 雅一…朝日町長  
 " 本林 荘三…富山県教育委員会社会教  
 育課長  
 考古学調査主任 寺村 光晴…和洋女子大学助教授  
 特別調査委員 福山 林継…国学院大学助手  
 " 安藤 孝一…文化庁文化財保護部技官  
 調査委員 竹内 俊一…宮崎小学校教諭  
 " 小島 俊彰…福野高等学校教諭  
 地学調査主任 藤井 昭二…富山大学助教授  
 調査委員 森 群平…朝日町文化財調査委員長  
 " 大田 弘…横山小学校校長  
 調査員(考古) 高橋一夫, 福木 正, 平松康毅, 川井  
 正一, 鹿熊多香子…国学院大学生  
 " 戸根与八郎, 藤田富士夫…立正大学生  
 " 島崎 静子…和洋女子大学生  
 " (写真) 清原 炳芳…清原スタジオ店主  
 " (補助員管理) 折谷 武彦…宮崎小学校教諭  
 补助員 泊高等学校郷土クラブ員  
 " 城山子供会会員(泊中学校生徒)  
 " 宮崎小学校児童

事務局長	有沢宗一	富山県教育委員会社会教育 課長代理
局員	神代 清	" 主事
"	荒井 断	" 主事
"	野村久四	朝日町教育委員会社会教保係長

## 目

第1章 浜山の調査	3
・遺跡の周辺　・調査の経過(第1次、第2次調査)　・表探査物	
第2章 浜山遺跡付近の地形と地質	9
・地形　・地質	
第3章 遺跡	16
・遺跡の状態　・工房址(第1、第2工房址)	

## 図版

第1 遺跡	13
第2 工房址	15
第3 第1工房址工作用第1ビット	19
第4 第1工房址工作用第2ビット	21
第1図 浜山遺跡周辺地形図	14
第2図 第1工房址実測図	17
第3図 第2工房址ビット配置図	23
第4図 第2工房址工作用ビット実測図	23
第5図 硬玉未成品	25
第6図 玉類未成品(勾玉)、蛇紋岩製重玉、硬玉、半玉未成品、硬玉叩石、硬玉軽石	26

## 主要写真挿図目次

・浜山遺跡周辺地形図	3
・浜山遺跡と宮崎海岸航空写真	4
・越中宮崎付近地形概観	9
・越中宮崎付近地図	10
第1図 浜山遺跡周辺地形測量図	14
第2図 第1工房址実測図	17
第3図 第2工房址ビット配置図	23
第4図 第2工房址工作用ビット実測図	23
第5図 硬玉未成品	25
第6図 玉類未成品(勾玉)、蛇紋岩製重玉、硬玉、半玉未成品、硬玉叩石、硬玉軽石	26

## 例

- 本書は、富山県下新川郡朝日町大字宮崎字浜山に所在する古墳時代の玉作遺跡調査の記録である。
- 本遺跡の発掘調査は、昭和42年4月18日(火)より20日(水)第一回第一次と昭和43年8月5日(水)より12日(月)第一回第二次の間、朝日町教育委員会及び富山県教育委員会が主催し、浜山玉作遺跡調査団がこれに当った。
- 調査団の構成は別項のとおりである。
- 本書の執筆は左のとおりである。
- 監修 国学院大学教授 文学博士 大場義雄  
編集 朝日町文化財調査委員会(竹内俊一)  
執筆

国学院大学教授 大場 義雄  
文学博士  
第6章 総括  
富山県立福野高等学校教諭 小島 俊彰  
富山県考古学会理事  
第4章 遺物 5 土器  
富山県立小学校教諭 竹内 俊一  
富山県考古学会理事  
第1章 浜山の調査  
第3章 遺跡 1 遺跡の状態  
和洋女子大学助教授 寺村 光晴  
和洋女子大学講師  
第3章 遺跡 2 工房址(第1、第2工房址)  
第4章 遺物 1 玉類及び未成品

## 次

第4章 遺物	24
・玉類及び未成品　・工作具　・鉄製品 ・その他の遺物　・土器	
第5章 硬玉と石製品	37
・玉をつくっている鉱物　・研磨材 ・浜山近くの硬玉(ヒスイ)産地	
第6章 結語	41
附録 浜山のはくつ	43

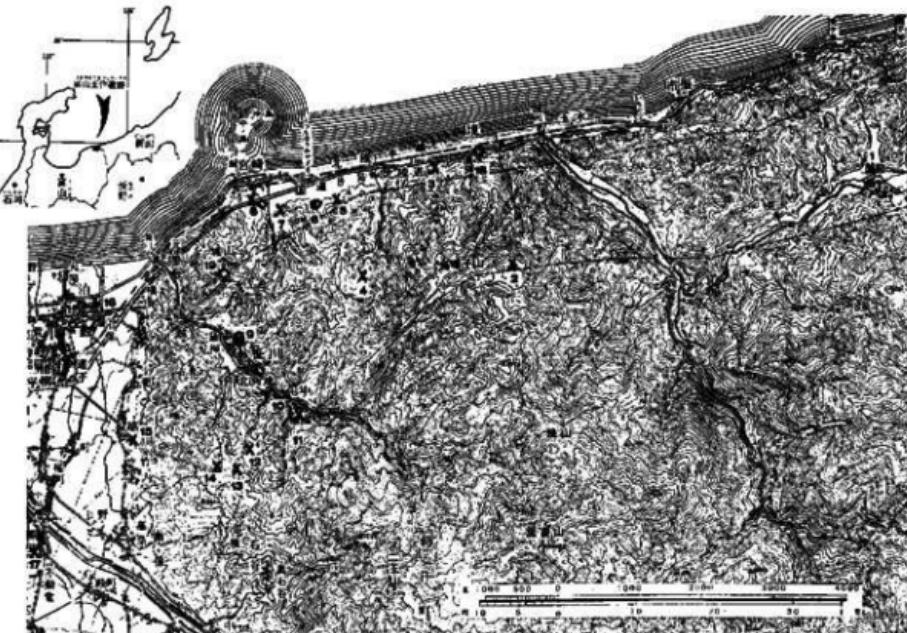
## 目次

第5 出土の硬玉	27
第6 山土の玉類	30
第7 工作用工具類と現代の硬玉の灰玉	31
第8 土器 その他	36

第7図 勾玉と勾玉未成品(滑石製)	26
第8図 管玉と管玉未成品(滑石製)	28
第9図 板状玉未成品、臼玉及び未成品、廉玉、ソロバン玉未成品(滑石製)	28
第10図 コマと棒状品	28
第11図 砂石類	32
第12図 鉄製品	32
第13図 上器 実測図	35
・浜山出土硬玉X線のパターン	37
・浜山出土硬玉の顕微鏡写真	38

## 言

- 2 工作用 3 鉄製品 4 その他の遺物  
富山大学助教授 藤井 昭二  
理学博士
- 第2章 浜山遺跡付近の地形と地質  
”
- 第5章 硬玉と石製品(五十音順)
- 5 本書の遺跡実測図は安藤孝一、川島明人、高宮史朗、戸根与八郎、藤田富士夫、松坂康綱、横木正、高橋一夫、川井正一、鹿島多香子の原図を、遺物は寺村光晴の原図を基として、すべて齊藤和子がトレースした。土器実測図は小島俊彰が作成した。他の挿図は竹内俊一が作成した。
- 6 本書の図版写真是、遺跡については清原為芳、杉山林蔵、遺物については寺村光晴が撮影したものである。図版作製は第8図は竹内俊一、他は寺村が当った。
- 7 文中(No.8)の如き記載は造物番号を示した。
- 8 本書は、当初各方面に執筆依頼を予定していたのであるが、諸氏の事情でお断りできなくなり、札を失した所が多い。失礼の段は何分共お詫び申しあげると共に、お詫び頂きたい。
- 9 文中に掲載した併付は、高野素十氏及び同氏の主宰の句説(序)に選ばれた。富山郡皆口会の諸氏による浜山吟行句である。
- 10 本書のなるに当っては、別項事務局諸氏の援助を得た。記して深謝の意を表するものである。



第1回 浜山遺跡周辺地形図 (1:50000)

- |       |        |         |         |       |
|-------|--------|---------|---------|-------|
| 1 古扇敷 | 2 池の平  | 3 境     | 4 常福寺   | 5 馬場山 |
| 6 茶山  | 7 刈り石  | 8 上の山   | 9 北野台   | 10 道溝 |
| 11 鹿藏 | 12 中の沢 | 13 水坪   | 14 鳥ヶ平  | 15 越  |
| 16 三浦 | 17 勝田  | 18 境内所址 | 19 宮崎城址 |       |

- |        |
|--------|
| ○ 先土器  |
| × 緩文遺跡 |
| ◎ 古墳   |
| ◆ 歴史   |

## 第1章 浜山の調査

### 1 遺跡の周辺

表日本のはば中央、越中平野の黒部谷底地を東に進むと、南に併えていた立山連峰も去って、行手を遮るよう白馬山系の北西縦にたつ黒巣山に連なる山脈が海に迫る。両越国境の西の起点ともなる城山山塊を越えると、漂渺たる日本海に沿って、白砂青松のヒスイ海岸と回廊状の狭い宮崎の平野が開け、前面は北陸道の難所、親不知の断崖が咀む。

浜山作遺跡はこの平野の山裾に見られる丘地の一つ、富山県朝日町宮崎字浜山地内にあった。宮崎はまた、漁に伸びる頭頭の彼方に能登の珠州、絆剛の傳を眺めることができる、宮山湊口の岬の村である。

海と山と多種な玉石に恵まれる両越国境には、新潟

県青海町の寺地、糸魚川市の長者ヶ原等、縄文時代の硬玉製品を生み出した、特色のある遺跡が存在する。

この黒巣山麓一帯もまた数多くの先史遺跡の埋蔵が明らかにされている。浜山に列ぶ海岸沿いの台地には縄文時代の攻玉遺跡の明石Aをはじめとし、馬場山、境の遺跡が知られる他、西の笛川渓谷に発達した河岸段丘に残される、北野、道溝、水坪、鳥平の道跡群。黒部の旧原状地東縫に位置し、縄文時代の中期から晩期に及ぶ遺物の発見された、越、横尾、三浦の遺跡など30を超える地点が知られる。

北緯 $36^{\circ}57'$ 、東經 $137^{\circ}33'$ に位置する、約 $50\text{km}^2$ の限られた範囲内に遺跡の集中するこのあたりは、先史人が生活を維持するために、極めて恵まれた条件にあ

ったことが推察される。また現代的には、前記の遺跡を解明すべく学術調査の進められたのも、浜山遺跡をもって嚆矢とするところから、先史遺跡研究の処女地であると同時に、各地では意義深い遺跡が荒廃し、刻々と煙滅しつつあると伝えられるこの頃、祖先の残してくれた貴重な文化遺産を集約的に保護し得る好適の地でもある。

浜山遺跡の前に広がる宮崎海岸はまた、古事記上々巻、四、八千矛の神が高志の国は、沼河比売の婚はむため幸でました「遠達し高志の國」の古くより、陸海交通の要衝でもあった事が推察される。即ち七世紀の末、天武天皇の頃「分越國為越前、越中、越後」(日本書紀)には既に一駅五四の駅馬を規定にした、小路の北陸道にあって、駅馬八匹を置き、西の布勢、東の親不知の輪を越えて瀬戸内海の駅と結んだ、佐味の駅がこのあたりに設けられた事を、延長五(927)年の延喜式二十八、兵部省諸国駅馬の項、北陸道の部から理解される。殊に天下の娘親不知の難所の往来をひかえ、西の宮崎海岸は人馬の通行にとって重要な位置を占めた。現在も裏日本を縱貫する北陸本線、国道8号線の2大動脈が遺跡の眼前に、砂丘を削って平行しながら走り、マイクロウエーブの中継所が城山の山頂に設けられている等のことでも頗るよう。

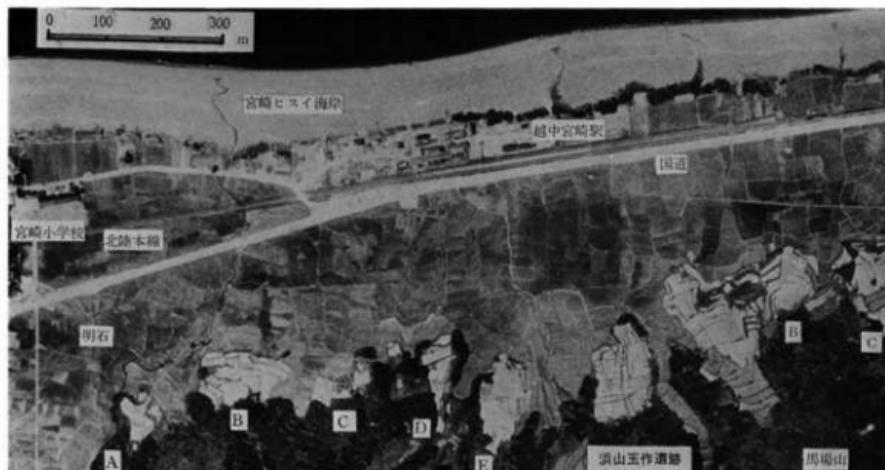
遺跡はこの海岸平野をとりまく山裾から梯状に発達し、北に突き出す10数個の台地列のほぼ中央に位置する。訪ねる道は越中宮崎駅の南に併行する国道8号

線に取付けられた横田林道を辿る。左手には素にかすむ親不知の断崖を隔て頬城黒崎山の麗姿を望み、右には治承4(1180)年、以仁王の御子、北陸の宮を擁した木曾義仲が、平家追討の兵を進めたと源平盛衰記に伝える、越中、越後の国境の要害宮崎城山の英姿を仰ぎ、沿って流れる江尻川のせせらぎに源を問えば、ほどなく谷狭間に着く、ここには、樹齢數百年を経て、幹に空洞を穿ったシイの巨木に囲まれる。玉の祖の御靈を祀るものであろうか、見崎社(宗次郎の宮)が、杉枯葉とシイの実を屋根にいただいて鎮る。その社前から東に、杉木立の下を通り抜け、細い坂道を5mばかり登ると、明るい台地に出る。そこが古墳時代にヒスイの玉作りの営まれた浜山遺跡である。

宮崎で古墳期の遺物が出土するのは、浜山ばかりでなくここを中心と両脇に位置する、明石E、馬場山Aの台地にも認められた。また縄文時代の玉つくりに関わる遺物は、明石A、馬場山Eにも出土することで、三方を緑の山々に囲まれ、美しい石の洗われる宮崎海岸を臨むこの遺跡群は、先史、古代の玉つくりの技を生み、それを醸成した、いわゆる「玉作りの故郷」ともいえまい。

註1 青木重孝、寺村光晴編『寺地硬玉生産遺跡第1次調査概報』青海町教育委員会(1969)

2 蓮田亮策、清水潤三『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会(1964)



第2回 浜山遺跡と宮崎海岸(航空写真)

提供 酒井 栄氏



ヤグラの下で発掘調査の進む浜山遺跡

蝶々の飛んでおりたる遺跡なか 東雲



1号址の検出されたN 3 Wトレンチ



勾玉も何々玉も冷やかに 松石



第1工作用ピットの調査中

## 2 調査の経過

### (1) 第1次調査

浜山玉作遺跡は、昭和40年4月から約2カ年にわたる宮崎小学校社会クラブ児童の、郷土研究と文化財愛護の遺跡分布調査のため、山麓台地の採集を行ったことから発見されたもので、それまでは、遺物の微細と浜山に関する文献、口碑、関連遺跡の皆無から、一般には未知のものであった。昭和41年秋に発見届が提出されると、浜山遺跡の持つ重要性を認めた朝日町文化財調査委員会は、町当局と計りその発掘調査の実現に努めた。その結果、翌昭和42年4月18日から27までの10日間、朝日町教育委員会が主催、宮崎地区の後援によって、大場養雄博士を団長とする、国学院大学、和洋女子大学、富山大学、富山考古学会の合同調査団が第1次調査を実施し、わが国で初めての、硬玉を主体とする工房址を、ほぼ完全に検出した。

調査は、表探遺物の群在が認められた、台地中央よりやや南西に偏する地点を中心に、遺構の検出、硬玉の追求等で行なわれた。

4月18日(火) 雨、台地全面グリットのため、南端高地に基点を設け、N 3 (EW) N20 (EW) 両トレンチで一齊に発掘を開始、N 3 W 4 の黒色表土層から深さ10cm位で筋延石一点検出、鋳入式には多数の参加者あり。

4月19日(水) 小雨となる。テントを張るも湿気強く土粘って調査難航、筋延石検出区を横にはぐと、叩石、内磨底石、筋延車、管玉が滑落位で群在、本遺跡の発掘には移植ゴテ、竹ベラが主役を務める。残遺構も浅そうだ。S 1 W トレンチ新設するも遺構なく中止。

4月20日(木) 北東の風雨強く夜中天幕も飛び、発掘作業中止、終日遺物整理と撮影。

4月21日(金) 北東の風が寒い。遺跡は日指しもまばゆく晴、細かい滑石と硬玉の混るローム層に達す床面と推定。拡張しながら滑石の白粉をたどり壁を求める。N20EWは日程の都合で発掘を止める。

4月22日(土) 晴、温かくなる。床面は相変らず滑石の細片と硬玉や蛇紋岩のフレークが散乱。移植ではぐと滑石の粉が白く流れる。東壁に当ると硬玉フレーク激増。接する面で落ち込みを発見し追求。あったあった。白と緑が陽光に映える硬玉の原石、未成品の集積場だ。近くでは鉢巻状に筋目を入れて一端を打ち欠いた加工半ばの硬玉も検出。南壁の周溝に滑倒状態で床面より脚台一個出土。壁には粘土状ブロックの瘤がある。地学調査も併行する。

4月23日(日) 晴、気温昇るも風強し、東壁の硬玉出土地を発掘。終日掘っては整理、削って撮影と続く。各層にはコバルトの空から注ぐ春陽に煌く硬玉がモザイックとなる。ピットの形は東の山の端に春月の観く薄暮に成る。工作用ピットは確かだ。地学調査も懸念である。

4月24日(月) 晴、工作用ピット掘り、深い部分まで土器片と硬玉未成品、滑石片が混る。あげ土は児童達の笊で洗い流しては臼玉、硬玉片をよりわかる。小さな手は皆な真赤。差し出すビニロン袋に玉やフレークが一杯だ。ピットの底部にはロームを彩る白い砥糞、紅の酸化鉄が土器に混って検出され完掘。第1工作用ピットと呼称する。

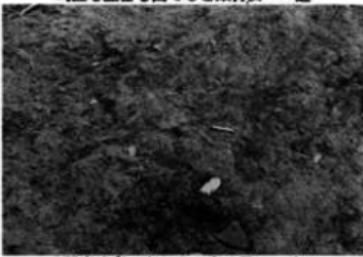
4月25日(火) 晴、初日、2日目と攻玉工具類の群在した北壁前床面を発掘。壁面に懸る管玉研磨未成品の発見を皮切りに、硬玉三角板、勾玉未成品など遺物出土引きも切らず。夕刻まで始末つかず、翌日の继续として打切る。午後泊中学校生徒による砂運搬と現地学習が実施される。

4月26日(水) 晴、暖かい日和に前日の作業継続、管玉の研磨未成品を主に出土したピットは長方形の深い底に、盤内磨底石、叩石、硬玉未成品や原石を埋蔵していた。第2工作用ピットと呼ぶ。午後は実測、撮影などの作業を統合各ピットに砂をつめて第1次調査を完了した。ここに浜山1号址の誕生を見る。

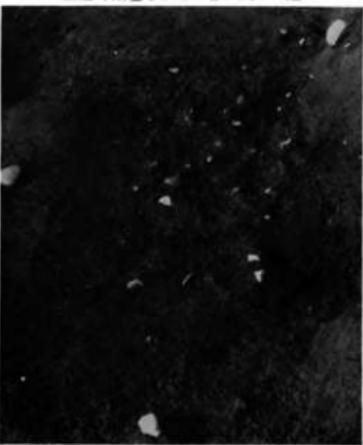
予想以上の成果を得た本次調査の記録は、写真及びスライドに加え、8mm映画としても残され、遺物・遺跡とともに訪れる人々にはこの遺跡を語り、広く文化財の保護と研究の資に供されている。



勾玉も土器も出でしと畠打女 一芝



五磨く底石もひとつ春の風 一芝



東壁に接するピットから湧くようなヒスイ片



山の端に春月の昇る頃まで調査は続く



南壁近くの床面に倒れる脚台



ころころと音のこるがる遺跡かな 東雲



スプーク附近で工房址を検出したN11W



炎天の遺跡調査の草分け 巨綱



慎重な2号址のピット掘り



西側土手のカッティング

## (2) 第2次調査(図版8下段)

昭和43年8月5日から12日までの8日間、炎熱に西瓜も丸く育った浜山遺跡では、富山県教育委員会、朝日町教育委員会の催しで、塩谷敏幸富山県教育長を団長とする、国学院大学、和洋女子大学、富山大学、富山考古学会の合同調査団によって第2次調査が行なわれた。今回は特に前回調査の成果を踏まえ、遺跡の解明が深まることに期待した。

8月5日(月) 晴。結団式を前に甘藷を掘り雑草を抜く。発掘地点は浜山1号址の北に隣接させた。トレンチは第1次調査の基点からN11W, N15W, N17Wと3本を設け、一齊に表土を剥ぐ。黒色表層土より瓦管、臼玉等出土したが終日遺物少なし。

8月6日(火) 晴。やはり暑い。時に宮崎浦を眺めて涼とする。遺構不明のまま、あぜを残して各トレンチを拡張すると、100m<sup>2</sup>近い調査区は平面発掘に近い形となる。N15W4で蛇紋岩製勾玉欠損品1個得たのが歓、協力の児童も手持無沙汰で泳ぎをすすめて帰る。

8月7日(水) 晴一時雨。N15Wを50cm×50cm掘るも層に手懸りなし、作業やや沈滞、発掘をW5に集中させ畠の土手を取る。黒色の土に生える夏草の根は深く20~30cmも伸び、それにからんで浜山タイの内磨石、滑石製勾玉未成品、蛇紋岩製勾玉欠損品など若干の出土あり、児童のふるい出しにも遺物が少ない。「スタジオ102」の取材にNHK高橋局員来訪。

8月8日(木) 晴一時雨。遺構は畠地造成の際の削平により煙滅か?苦しいが熟考。遂に臼玉、滑石フレーク、土器片の散乱が比較的多いN11~N15のW1, 2, 3, 同E, 1, 2に主力を移し、床面と各ピットの発見に取組む。床面より紡錘車等出土、日没頃には床面や柱穴等、遺構に伴なう施設の把握で懸念を開く感あり。

8月9日(金) 晴、風なし、暑い日指しを背に受け、土の生気をかばって東から西にまわりながらのピット掘りが続く。床面もヘラを使い土の乾燥と色調を逃さぬようたえず散水する。あげ土は児童の荒で洗う。工作ピットも床面の西隅で検出する。台地の全測も併行することにし、工房址もほぼ形をなす。

8月10日(土) 晴、実測と撮影完了後、全員で浜山台地の全測に取りかかる。

8月11日(日) 晴後雨、遺物整理と撮影、測量図の修正等の作業や反省会を持つ。

8月12日(月) 後始末もすませ今次調査完了。今回検出の工房址は浜山2号址と呼ぶ。これで第1次、第2次と調査して2個の工房址(製作場)を確めた。しかし遺跡が永い年月を経て崩壊し、一部に人為的な搅乱や、耕地造成の削平があった現状からも、この工房址の検出は調査員の努力もさることながら、極めて侥幸であったといわざるを得ない。改めて喜ぶ。夕刻「スタジオ102……越中浜山遺跡の発掘調査」をテレビで放映するため、真黒に日焼けした子供達を伴ない富山向う。

### 3 表 探 遺 物

浜山での遺物散布地は、台地のほぼ全面に及んでいたが、特に濃密だったのは、畠地開墾に伴なう削平の比較的激しそうな、浜山1号址、2号址を検出した周辺で、黒ずんだ植土と地山から掘りかえされた赤土の混る、表層土中であった。しかしその採集も遺物の微細なことから技術的な困難さを伴ない、数も200回近い調査で相当な根気を要した。しかし社会クラブの児童達はよく克服し、主体的な活動によって次第に遺物を増しながら、散布地の濃淡を図面上に現わしてくれた。昭和41年8月には上板成次氏の蔵する表探遺物の提供によって、第1次調査を前に攻玉工具、土器片、玉、石材フレーク、各種未成品で約600点を超える遺物を手にすることができます。

#### ・勾玉未成品

形が整い穿孔されているが殆どが滑石製の未成品か欠損品である。これには断面が円形に近いものと、板形の2種が見られる。主として1号址の表探であるから、その出土遺物と関連して考える必要があろう。

#### ・管玉未成品

滑石製で1号址周辺の表層より採集した。管玉は第1次調査の第2工作用ピットの検出で80点近くも出土していることから、それと一連のものである。

#### ・板 状 品

両面で研磨し規格によって整形された、厚さ2mm程度の滑石製板状品も多い。内には周縁に研磨を施したものもある。

#### ・垂 玉

硬玉と蛇紋岩を加工した垂玉で、2号址周辺から採集した。図29は厚さ3mmの研磨未成品、その右30~32は孔部で欠けた蛇紋岩製品、垂玉には形の上から3種類が見られた。

#### ・臼玉未成品

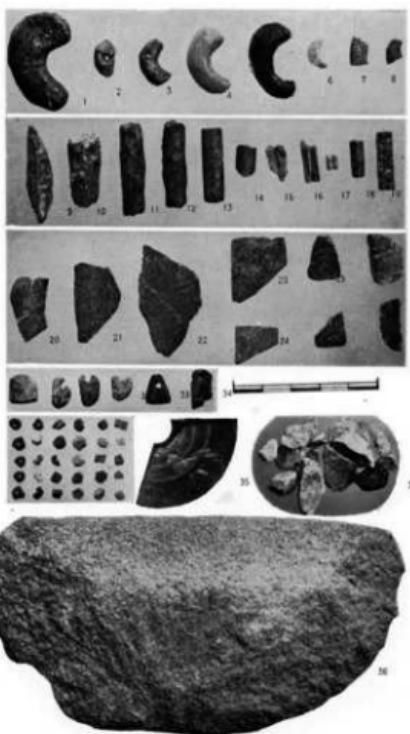
滑石製の臼玉未成品は台地の全域から採集され、穿孔までの製作工程が明らかにされた。

#### ・攻 玉 工 具

滑石製筋車の破損品砂岩製内磨砥石で、ともに1号址周辺から採集された。砥石の類似品は発掘調査によつて、1号址から2点、2号址から1点の計3点が出土した。

#### ・硬玉等未成品剝片

浜山台地全面から採集されたもので、浜山の硬玉工房址の埋蔵を教えてくれた。微細な剥片まで加えると相当量となる。(竹内俊一)



- |         |          |
|---------|----------|
| 1 ~ 8   | 勾玉および未成品 |
| 9 ~ 19  | 管玉および未成品 |
| 20 ~ 28 | 板状未成品    |
| 29 ~ 34 | 垂玉および未成品 |
| 35      | 筋車片      |
| 37      | 臼玉および未成品 |
| 38      | 硬玉未成品    |
| 36      | 砥石       |

註1 上板成次「宮崎出土の滑石製品について」

昭和41年4月 富山考古学会誌大境2号

註2 竹内俊一「越中宮崎浜山玉造り遺跡の記録」

昭和42年3月 朝日町文化財調査委員会

## 第2章 浜山遺跡付近の地形と地質

### I 地 形

#### A 地形のあらまし

当地域は富山県の東端、飛騨山地が海に没する所に位置する。北は黒菱山（1043m）が海岸から5kmの距離にあり、西は城山山塊（248m），東は境川で境され、北は日本海に面している。

飛騨山地の北端は後述するように断層で境され、そこに崖壁が発達しており、崖壁の一つに浜山遺跡がある。

海岸は東から供給される物質で構成され、一部砂丘となっている。この海岸は県下のヒスイの産地となっており、これらヒスイの一部は浜山遺跡でも使用されている。砂丘と丘陵との間は海浜の湿地帯となり、小川によって逐次埋積されている。

#### B くわしい地形の説明

##### 1 海岸段丘面

海岸段丘は後述するように三層あるが、その中で地形面が発達するのは、海拔20~25mの地形面だけである。

海拔20~25m（以後この地形面を越中宮崎面とよびその堆積物を越中宮崎灘層という）の地形面は、山地の北端に発達している。詳しく調べるとそれは西端と東端とによく発達し、中央部は崖壁におおわれて不明瞭になっている。

この地形面はこの地域に発達する唯一の海岸段丘面

であることは、堆積物の円磨度や、大きな河がなく、海に面していることから明らかである。

##### 2 海岸と砂丘

海岸は砂、礫の海岸となっている。その堆積物は東側の姫川や境川などから供給されている。姫川後背地が非常に荒廃しているため物質の供給が盛んで、宮崎漁港の防波堤を建設したさい。堆積と浸食についての大変貴重な資料をうることができた。（藤井、島倉・1963）

砂丘は海岸に平行しており、高くて数ヶである。宮崎部落の付近では礫丘を砂がおおっているが、宮崎駅から東では、いわゆる砂丘を形成している。前者は人家の発達とともにその形を失なっている。この砂丘の形成により後背地は畠田となっている。

##### 3 断 層 崖

当地域の断層地形として辻村太郎（1926）は黒菱山断層崖と棚山断層崖について述べた。しかし棚山断層崖は弘原海ら（1955），藤井昭二（1958）により段丘崖とされている。

また辻村太郎（1926）は越後断層を親不知の付近まで伸びているとして、親不知の付近を断層海岸と考えている。

境神社の後と同神社より300m東の沢の入口に海岸に平行な多くの断層の露頭がある。また山地の北端には崖壁性崩壊地が多く分布し、地形的にも断層崖と見



越中宮崎付近の地形概観

E：砂丘 F：澗埋積地 G：崖壁性崩壊地 H：宮崎海岸段丘面（海拔20~25m） I：断層 J：基盤岩

られないことはない。

この断面は猪神社の東から宮崎小学校の南まで3.4kmの距離を、広い所で巾75mで海岸に平行に走っている。このように見ると山並みの座屈の分布もよく説明される。

#### 4 層状地性崖疊合地(崖疊合地)

北陸本線、越中宮崎駅の南面に巾約500m、北東から南西に長さ約4kmにおよぶ凹凸を複数重ねし、水田となっている宮崎海岸平野がある。

この宮崎海岸平野の南の山腹に、地表勾配南から北へ約10度の層状地性崖疊合地が点在している。大きさは南北に約100~200m、崖疊形の巾が約70~150mの台地が宮崎小学校南の古川の谷から東へ、境駅泉の横を流れる大谷川の谷までの間に11つある。台地の頂部は海拔約30m、末端は海拔約10mである。

この崖疊合地は、背後の山間部から供給されているが、現在山間の谷の浸食が復活し一つの台地が浸食によって二つにわかかれている所が多い。

この崖疊合地は規模や勾配の大小によって異なるが5~10mの厚さの堆積物によって被われている。一般に堆積物は台地の頂部に厚く、底盤部に浅く堆積し、地表はほとんど畑地となっており、台地の末端部は急斜面か、小さい段でもって畠地帯と境している。

この段は比高約2mと1mの二つの段からなり、ところにより2段が重なったり、われたりし、流れのそばでは、多く不判別になっている。一般に台地間に流れる谷川が大きいと、その後の堆積物によって段は

不明になり、そのため段丘の明瞭なのは台地の末端部にみられる。

## II 地質

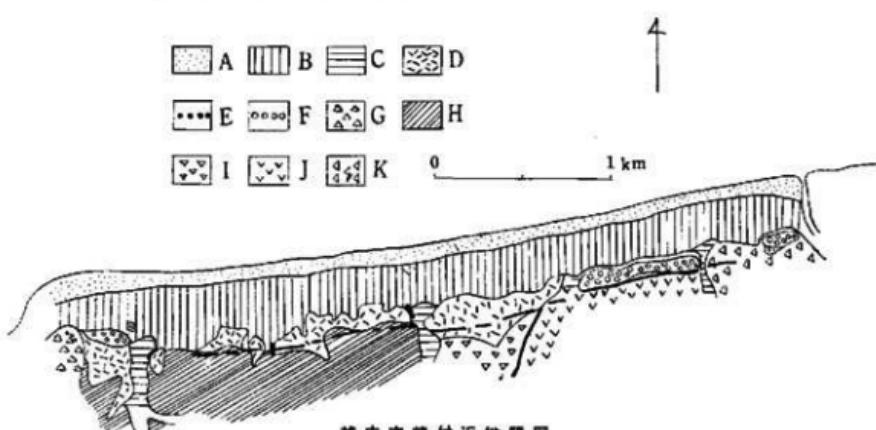
### A 地質のあらまし

当地域の地質については市村賀一(1935)、石井清彦(1937)、内尾高信(PEAC, MS.)藤井昭二(1959)らの仕事がある。藤井(1959)によると地質系統表のように細分され、それらは地質図のように分布している。

第1表 泊付近の地質系統表

		仙沢疊層				
八 尾 層	泊 蒸 層	横 毛 砂 質 泥 岩 層	青 島 安 山 岩 質 集 塊 岩 層	蛭 子 シ ル ト 岩 層		
	筒 川 累 積 層	黒 色 硬 質 珪 長 質 凝 灰 岩 層				
群	岩 炭 稻 層	火 山 巖 層	巖 溶 岩			
太 岡 美 山 群	烏 帽子 市 坂	山 ネ バ ダ イ ト 質 層	山 リ ソ イ ダ イ ト 質 層			
	基 盤 岩	類				

(藤井 1959年一部改)



越中宮崎付近地質図

- A 海岸堆積物と砂丘 B 海運物 C 溝間堆積物 D 層状地性崖疊合地  
E 海抜10~15m疊層, 海拔60~65m疊層 F 越中宮崎(面)疊層 G 宮崎安山岩質集塊岩  
H 黒色泥岩 I 雁坂安山岩 J 烏帽子山ネバダイト質層 K 市坂リソイダイト質層

黒巣山断層は太美山断層と八尾断層とを境する大断層となっている。

この地域の太美山断層はK/Ar法によって6,000万年ということが明らかにされている。

第四系をのぞいた地質については、藤井(1969)に詳しいので重複を避け、第四系についてのみ述べる。

#### B 第四系について

##### 1 海岸段丘疊層

第2表 宮崎地域の第四系

関東地方	(HQRG 1963) 水見段丘	宮崎地域
鶴文海進期	沖布面(沖積層)	冲積面、崖壁、砂丘海岸の形成
下末吉期：宿南(底砂層) (第三回水期)	伏木面(伏木疊層)	越中宮崎面 海拔20~25m (疊層)
	—	海拔60~65m (疊層)

当地域に発達する第四系に属する疊層は、海拔60~65m、20~25m、10~15mの三つの疊層にわかれている。この地域には地川をのぞいて礁を運搬するような大河がなく、これらの疊層はそれも日本海に面して分布し、円度のよい扁平な形をしており、この付近に分布しない結晶片岩や、蛇紋岩などの岩盤を含むことなどから、かつての海浜堆積物であると考えざるを得ない。

##### a 海拔60~65m疊層

本疊層は鹿島神社奥殿の海拔60~65m付近に僅かに分布している。疊層は2~3cmの円錐が多く、5~6cmのものもある。疊はかなり密在しており最大疊は中径が15~20cmで、充填物は粗砂の所もあるが、多くは砂質泥になっている。確實は石英粗面岩、安山岩が多く、丸いが扁平ではない。疊層の上には黄赤色の土塗が10~20cmの厚さで分布している。

##### b 越中宮崎疊層(海拔20~25m疊層)

本疊層は地形の所で説明したように唯一の地形面を作る疊層で最も広く分布しており、境、宮崎の両都落よりよく発達しており、疊層は約15mの厚さである。

すべて円錐で最大100cm位のものもある。充填物は粗砂で、岩質は安山岩、石英粗面岩、砂岩、礁岩などで東に大きく西に小さくなり、それとともに扁平度が増している。

##### c 海拔10~15m疊層

本疊層は宮崎小学校南、境鉄道、見崎神社の3カ所に分布するが、見崎神社の疊層は本疊層と関係のないものか知れない。

c-1 宮崎小学校南の明石台地の下では、木疊層は層厚60cmの砂層で上下二層にわけられる。

上部疊層は層厚約30cmの梢円形の円度のよい扁平

な小疊の集まりである。非常に扁平でかなり規則的にならんでおり新鮮で、充填物は砂質泥から構成されている。

下部疊層は層厚55cm以上あり、5~10cm位の扁平な円度の発達した疊からなり、疊質は安山岩、石英粗面岩などが主である。

c-2 境鉄道の南の大谷川の西側の崖そいに層厚3mの疊層が分布している。小一中疊が多く、一部細疊もある。この疊層はc-1の疊層のように密在せず、といつて充填物が多いわけではなく、現在の海岸線に非常に近い形をとっている。疊層はネバタイト、リソイダイオ、安山岩や泥岩などが多く非常に局的に分布しており、疊は新鮮で、充填物は中粒の砂質泥からなっている。

c-3 見崎神社の礼殿の東側に手穴があり、そこから小一中疊の円錐がでてくる。これも高度はc-1 c-2と同じ位で、地形的位置からいうとかなり似ているが、疊の集合状態からいふと、泥の中に点在し、崩壊地の疊層に近いようである。

c-4 宮崎部落の南の台地(東上の山)は、主に越中宮崎面を形成する疊層からなっている。海拔10~15m疊層に相当する疊層は当然あることが考えられるが、海拔20~25m面を形成する疊層がたれ下りそれと区別できない。

#### C 第四系の地史

宮崎県で海岸段丘の発達しているのは、当地域と氷見付近である。氷見付近の海岸段丘は表のように沖布面、崖面、国分面とにわかれる。崖面(海拔30~35m)は伏木面(海拔20m)、朝日山面(海拔40~50m)とにわかれてよく発達し、当地域の25m面に対応している。この面は地形面高度、層がから、関東の下木古面に對比されている。

海拔60~65m疊層は氷見の裏面に地形面高度が類似しているので、必ずこの面に對比される可能性が大きい。しかしこの面の発達が悪く、また、これより上位の海成段丘面などが不明瞭なため、何時の間水期あるいは、氷期中の暖期に相当するか不明である。

海拔10~15m疊層に相当する海成層として、氷見には沖布面が発達している。しかしこの地形面は海拔6mより少し高く位置している。だが本疊層は海拔10mよりやや高く、さらに崖面におおわれている。沖布面層は鶴文海進期と考えられている。

海拔10~13mの疊層については次の二つの考え方がある。

##### 1 鶴文海進期の堆積物

##### 2 海拔65mなどより古い海成層

1と考えた場合、他地域の鶴文海進期の地形面が海

抜約5mといわれ、それよりいちじるしく高くなり、この付近が約5000年以後に異常な隆起をしたことになる。

東岸野の埋没林が、かなり急激な上昇をしていると考えられるので、近年の急上昇としてもよいが、そのように考えると越中宮崎町が、今から5000年前には海拔約15mの高度になり、異常に低くなる。または状態性崖縁地形は断層の発達に關係しており、この崖縁は本疊層を被っているので5000年以後の非常に新しく形成された地形となる。しかし崖縁は前述のようにかなり浸食されており、崖縁を形成している男石台地からは概文早前期の遺物も知られているのでこの考えは矛盾する。

海拔60~65m疊層の形成時代より古く、この付近で一番古い洪積の海成層とすると、もうすこし傾斜しているとか、何か他の証拠があつてもよきそうである。しかし、ここではそのような事実はない、疊はかなり新鮮である。そのため1とも2ともきめ難いが、後者と考えた方がこの地域の地盤運動を考えるのに無理がない。

#### 第四系の地歴をまとめる

すなわち、当地域に第1回の海進が行なわれ（海拔60~65m疊層）たが、その堆積物はあまりよくのこっていない。

次で25m地形面をつくった海進が今から約10万年前におこった、この海進は日本の他地域と同じく当地域にも、広く、明瞭な疊層と地形面を形成した。この海進期はいわゆる下木吉海進としてしらされている。その後堆積の形成が急速に進んだ。

そののち水期が再び訪れ、約2万年を境に海面は低下から上昇し、約5000年前に海拔数mに上昇し最高に

達し、その後現在みると海岸線がはり出し、砂丘ができる、その内側に潟ができる、それが小河川の堆積作用により埋積され水没と変わった。また、洪積世の末から沖積世のはじめにかけての越後断層の延長の新たな断層運動により山腹側には扇状地性崖縁が発達し、潟を埋めるのを促進し、現在のような地形が形成された。

（藤井昭二、森 駿平、大田 弘）

藤井昭二（1958）富山県朝日町東部の新生代層、富山県の地理学的研究

第3集 121~126頁

藤井昭二、島倉三三郎（1963）黒部川東部の埋没林と汀線変動（要旨）

地質学雑誌 69巻 330頁

市村賀一（1935）富山県下新川郡三日市東高方第三紀層産出化石

地質学雑誌 42巻 59~73頁

石井清彦（1937）七万五千分の一白馬岳図幅とその説明書

北陸第四紀研究グループ（1963）富山県氷見周辺の第四系

辻村太郎（1926）飛騨山脈の北端における断層崖の二形式

地理学評論 2巻

内尾高保（1950）富山県東部の第三紀有孔虫群について

地質学雑誌 56巻 275頁

弘原海崎、藤井昭二、市原 実、松本 勝、池辺辰生、赤坂秀雄、津田米粒（1955）

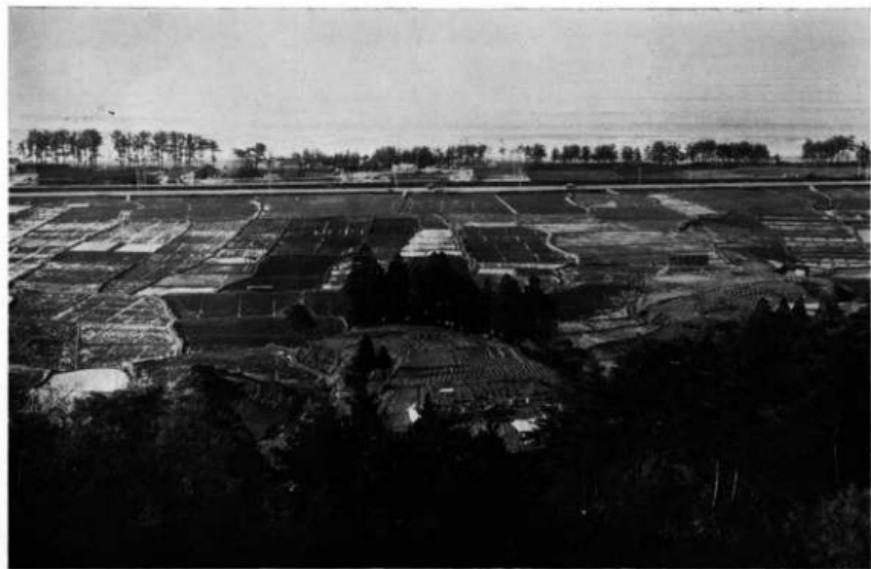
富山盆地東部の新生界

地質学雑誌 61巻 360頁

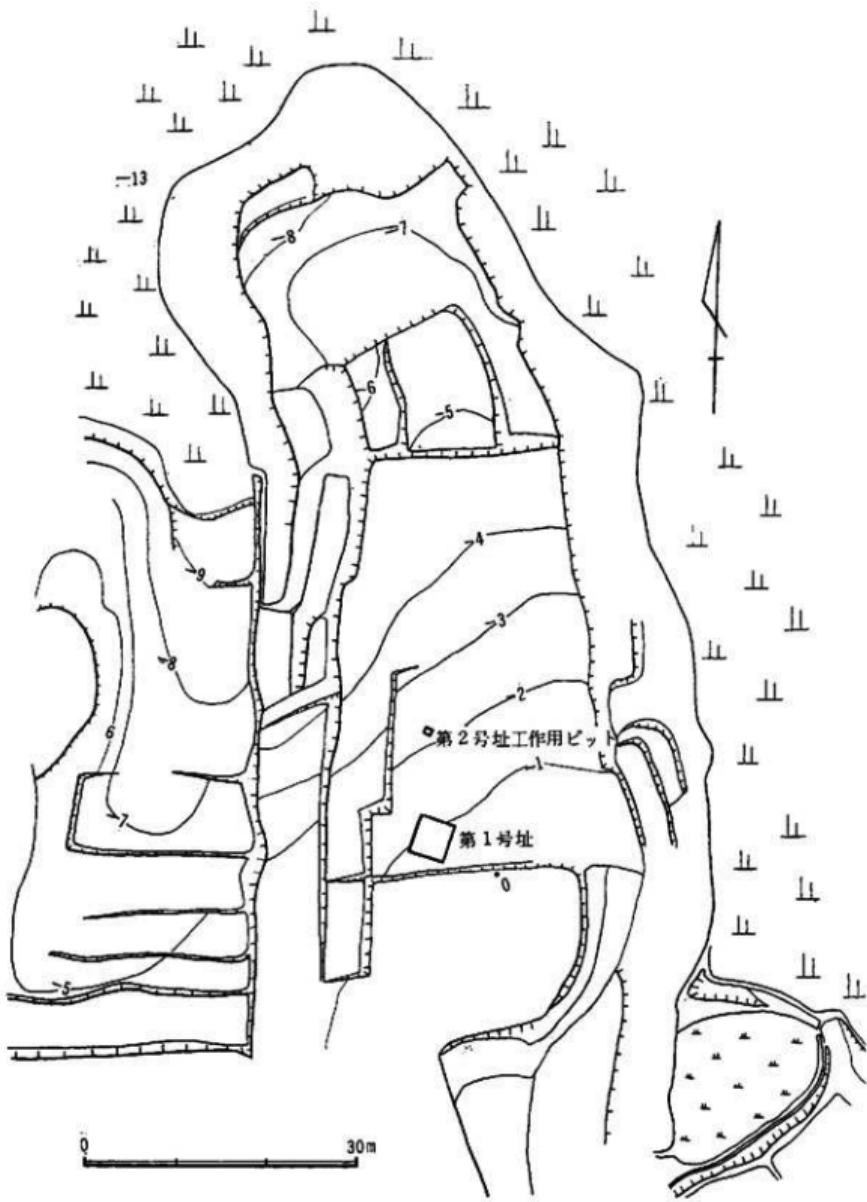
第1 遺 踪



海岸北付近より浜山遺跡を望む（中央テントの台地）



浜山遺跡を経て日本海を望む（中央出土台地ヤグラの所が発掘調査地点である）



第1図

浜山遺跡地形測量図

第2工房址



上段 第1工房址  
中段 第2工房址  
下段 第2工房址の工作用ピット

### 第3章 遺跡

#### 1 遺跡の状態

浜山遺跡は、黒糸山に連なる山地の木場から5~10度の緩やかな傾斜で、日本海に向って突き出す舌状の台地である。この北端からは宮崎ヒスイ海岸の砂丘に育つ緑の松と並んで、白く引かれた潮騒の溝まで約500メートルとなる。既には、海岸平野の水田と砂丘に沿って東西に通する国道8号線や北陸本線が眺められる。

台地は標高15~25メートルで、南北約130メートル、東西が約85メートルで、中央部西寄りに浅い窪地を持ち、末端では長く伸びる東台地と短く西台地に別れて見える。浜山では西瓜・甘藷などの畑作が行なわれるが、耕作の範囲や永年の耕作と表土の流失によって稟杭上の表層がきわめて薄く、ほとんどが地山の赤土を露出させている。水田との比高5~6メートル。

遺物の散布は台地全面におよんでいるが、うちでも東台地に多く、その中央部付近では、数か所で赤土に溶け込みように、細かい土師片と混って、梗玉の原石や剝片、滑石の剝片、玉類未成品などが群在していた。

(竹内俊一)

#### 2 玉作の工房址

検出した堅穴は第1次調査で1、第2次調査で1、計2個であるが、他にも遺物の散在が若干認められるので、なおも堅穴の存在が予想される。今後の精査によっては、堅穴の数が増加するかもしれない。

##### 第1工房址

本址はN3トレンチの西端部において発見された。その位置は遺跡に設けた中軸基準線の0点から6、8メートル、10メートル点から6、15メートルに堅穴の東北隅がある。0点から6、8メートル、10メートル点から10.8メートルに東南隅が位置している。浜山の台地はわれわれが設けた南北に走る中軸基準線をほぼ頂点として東・西両縁がゆるい傾斜を示しているので、堅穴の西端部は新作のため表土がほとんど流失し、壁部もかなり削離されているよう、西壁に関する明瞭さを欠いている。

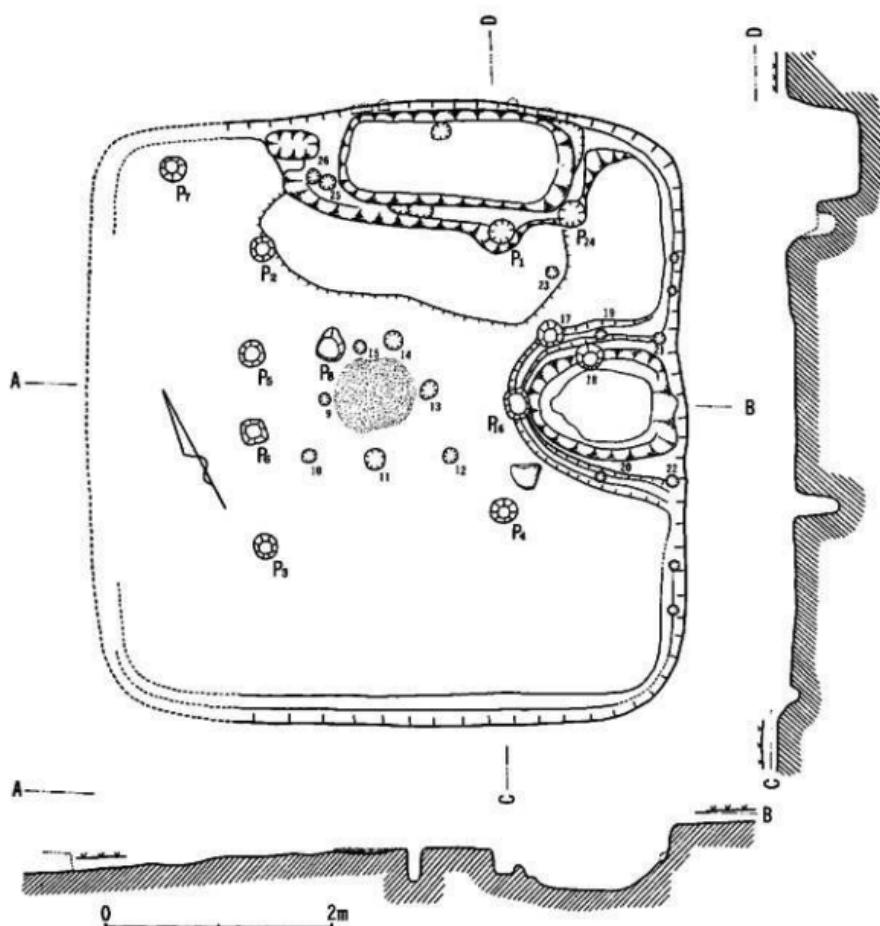
プランは東壁長5.25メートル、南・北壁の現存部長約3.8メートル、堅穴中央部南北長5.4メートルで、若干削り落した四角形に近いプランを持っていたものと推察される。壁面はかなり丸みを持ち、掘り込み(壁高)は東壁15~21センチ、南壁はぼく白灰で12センチである。壁は若干傾斜し周溝がめぐっている。すなわち南壁で巾13~16センチ深さ4~9センチ、南壁南半で巾11センチ、深さ8センチ、東壁北半で巾11~14セン

チ、深さ5センチ、北壁西半で巾約10センチ、深さ8センチの周溝が壁に接してめぐっている。なお、北壁の周溝内には径6センチ、深さ8センチの小孔が第2回の如く4箇認められた。これは周溝内に通常みられる穴孔であろう。

東西南半部は中央から約2度の高まりで南壁に至り西半部は約6度の傾斜を示している。これは前記の表土流出に際しての二次的な剥離に原因するもので、本来は若干の傾斜を持つものの、ほぼ水平で平坦な床面を構成していたものと考えてよからう。中央部周辺および工作用第1ビット周辺の東半部床面はかなり空隙であったが、西端部は欠失のため明瞭でない。工作用第2ビット周辺に接して巾70センチ前後、長さ2.7メートル、床面からの高さ約7センチの長方形土台状土とみられるものが存在していた。この土台は工作用第2ビットと周連して設けられた施設の一つと考えられる。なお、土台の東端にP23の小ビットがあり、西端に

第3表 第1号址 柱穴計測表 (単位cm)

PN	長径	短径	深さ	備考
1	28	26	42	
2	25	22	36	
3	23	21	50	北に7度傾斜
4	26	22	45	北に8度傾斜
5	24	24	20	
6	26	25	35	
7	23	23	30	
8	30	27	39	東南隅に向い7度傾斜
9	10	10	6	三角形状
10	14	13	35	
11	20	20	47	
12	15	13	13	
13	19	15	30	土器片あり
14	18	17	25	
15	13	13	4	
16	29	20	26	深さは床面より長方形状
17	21	21	35	
18	27	24	30	深さは溝底より
19	10	9	10	
20	10	10	14	
21	11	11	10	
22	10	10	10	
23	11	10	16	
24	27	24	23	
25	17	14	10	
26	15	14	12	



第 2 図 第 1 工 房 址 実 洞 図

あるP2(主柱穴と推定される)と対称していたのは興味あるもので、土質の機能を推察するに十分である。

柱穴は工作用特殊ビット所属のものも加えて26個検出された。計測は前表のとおりである。

このうち主柱穴はP1・P2・P3・P4と考えられ、P5・P6は割柱、P16・P17は工作用第1ビット所属の柱であるとともに、同柱の機能をも果したものでないかと思われる。P8～P15は炉をとりかこむかのように配置されている。P7だけが北西隅に存在しているが、対称的位置の南西隅には柱穴を検出していない。

炉は窓穴のほぼ中央にあり、70×60センチの範囲がきわめて良好に焼けており、焼土の厚さは約5センチで、断面レンズ状を呈しているが、通常の炉のような跡みとなっていない。

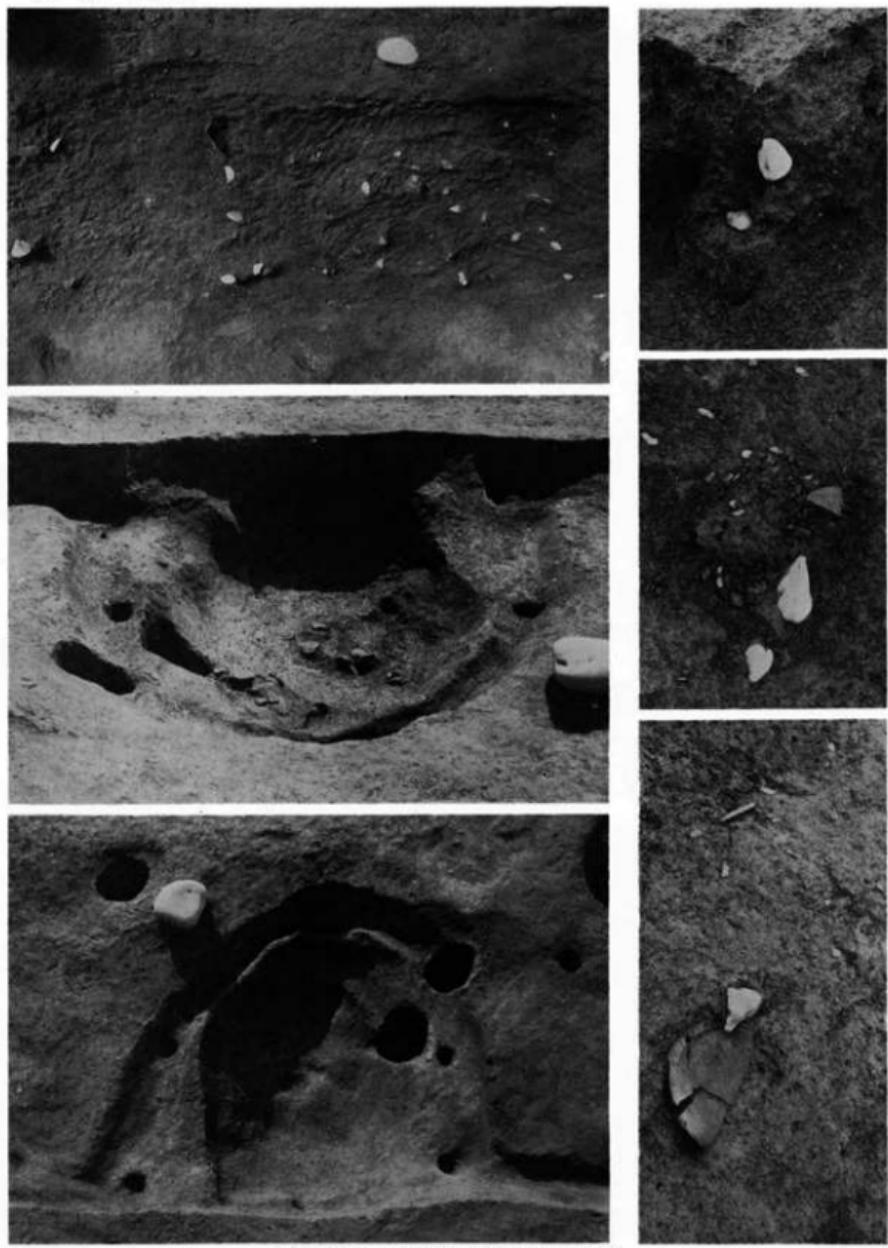
工作用特殊ビットは2例が認められた。すなわち、工作用第1ビットと第2ビットである。工作用第1ビットは東壁中央部に接して設けられていた。平面形エプロン状を呈し、主軸長(東西)1.65メートル、壁側の巾(南北)1.7メートル、ほぼ中央で巾1.5メートル、床面からの深さ約35センチ(四床面から30センチ、南床面から38センチ、北床面から35センチ、東壁外から約60センチの深さとなる)である。主軸は東壁に対してもほぼ直角で、わずかに1度北にふれている。本ビットは中央部の掘り込みと、これをめぐる溝および小ビットからなっている。中央部の掘り込みは半円を細長く引き延ばしたような形で長さ87センチ、巾63センチ、先端が半円状に約10センチ突出し、凸状をなし、四周をわずかに判別できる二段のテラスをめぐらしている。しかし、壁に接する東辺のテラスは明瞭でない。いまこの東辺を基部、西側を先端部と仮称すれば、基部を除く外縁は巾約14センチ、深さ約4センチの溝をめぐらしているが、先端近くでは巾10センチと狭くなり、深さも2～7センチと所により浅深がある。そしてこの溝はそれぞれ東壁の周溝に連続している。基部にはP21・P22のはは同大のビットが溝の内側の対称的位置にうがたれていた。また、溝の内側の隆起部が北壁部に接する地点は、巾約30センチにわたりわずかに壁の凸凹が認められた。さらに長船のはは中央両側にもP19・P20とはほとんど同大のビットが同じく溝内に対称にうがたれ、先端部にP16が位置している。この5個のビットは、工作用ビットの形態と関連して、規則的な配置の下にうがたれたものであろう。すなわち、本T.作用ビットの工作機能に重要な意義を持つ施設の痕跡と考えられる。ところで、P17ならびにP18がT.作用ビットと関連するが如き位置、すなわちP17は北縁の溝に接して外側に、P18は溝に接して内側にうがたれている。P19～P22に比してかなり大きなビ

ットであるが、本ビットもやはり何等かの意味において、この工作用ビットの工作機能に似たものと考えざるを得ない。しかしこれらのビットが、工作用特殊ビットの形態と相俟ってその機能を認めたとしても、ビット上に架された施設の形態についてはいまこれを詳らかにすることはできない。なお、ビットの底部には破片ではあるが土器(№198)が存置されたと思われるような状態で出土し、南北約10センチ離れて斜角25センチの扁平の石(№67)がおかれていた。この石は表面平滑で平底石としての役を果したと推察される。

本工作用第1ビット内出土の遺物は第5表「出土遺物一覧表」の如く、きわめて多数の木製品が出土している。個々に記号を付したものは一覧表の如くであるが、きわめて微細な断片に至っては、これに記号を付すことができないので、番号外で一括したが、工作用ビット内および周辺からのこれら削片の出土状況は移植ゴミで薄くはぐたびに、満天の星の如く無数に白く検出されたことを特に記しておくなければならない。

工作用第2ビットは、北壁中央よりやや東側に寄って位置し、蓋に接して検出された。二段の掘り込みを持ち、下段では東西長2.1メートル、南北長88センチ、深さ約64センチ、開丸のほぼ長方形を呈した穴で、底部は東西長1.88メートル、南北長68センチのやはり開丸長方形を呈している。このビットの東・南・西縁上部は、東・南縁上部で巾10センチ前後、西縁上部で巾約28センチのテラスを形成し、さらに高さ約25センチの壁で上邊および床面に至っている。北縁のテラスは明瞭には存しないが、テラスに相当する位置に傾斜変換線を認めることができる。窓穴床面が若干西傾しているので、計測値は半として工作用ビットのはは中央南北の縦を引いたが、所によりこの計測値が異っていることは言うまでもない。換算すれば、東西長2.78メートル、南北長1.18メートル、深さ約25センチの開丸長方形に近い凹みの中に、北壁に接して東西長2.1メートル、南北長88センチ、深さ88センチのやはり長方形のビットをうがったものである。このテラスの面は東西西端においてそれぞれ北壁の当溝に連続している。壁下底部から北壁外の地盤面までの高さは84センチである。注意すべきは第4図にみられる如く、北壁に直角に4個の孔が対称的うがたれていることである。すなわち、内側の孔は1.04メートル離れて、それぞれ直角8センチ、奥行13センチの円形の孔で、両者の数値は全く同一である。外側の孔は1.43メートル離れて東孔は巾21センチ、高さ20センチの半円形で奥行7センチ、西孔は巾21センチ、高さ18センチ、やはり半円形で奥行6センチである。この孔も東西とともに同

第3 第1工房址



工作用第1ビットと遺物出土状態（第1工房址）

大といってよい。しかもこれら4個の孔はテラスと同じ高さにあり、仮りにこれらの孔とテラスに板あるいは棒をさし渡すとすれば、工作ビットの上部にこれらの板や棒を水平に渡すことができる。本ビットがかなり長大なものであり、かつ深いものである点から推察すれば、ビット上部に板などをさし渡していたという施設構造を削除することはあながち不当ではあるまい。さらにP25・P26とP24がやはりビット南端の東西両端に対称してうがたれている。P25・P26は接続しているので、一方の柱穴ビットが他の柱穴ビットの補柱である（例えばP25を補助してP26が受けられた）と考えるか、またはうがち改められたものとすれば、この対称的な柱穴も工作用ビットの機能に関連する重要な構造上の痕跡である。P1もこれに関連するかもしれない。例えばP1の基部に接して上層上から工作用ビット内に内磨、外磨筋砥石、砥石、弔石が崩れ落ちた状態で検出された（第4図）、近くからコマが見出された如きは、あるいはP1が本工作用ビットに関連を有していたことを示すものかもしれない。しかしP2が北壁から1.15メートル、P1が同じく1.15メートル離れてある点から推察すれば、主柱穴としての機能がより優先することは否定できない。なお、ビット底部のほぼ中央北壁に接して径約15センチ、深さ0.7センチの浅い凹が存在し、内磨砥石（No.164）が出土した。また、テラスの南縁に巾23センチ深さ10センチの切り込みがあった。すでに第1章発掘の経過の項に記述されているように、工作用第1ビット内の土がかなり硬かったのに比して、本工作用第2ビット内の土は比較的軟かであった。遺物はビット上部から底部にわたる間に検出されたが、上部はほとんど研磨工程の苦心のみで、剥片等は少なかった。しかし、床面下20~30センチ以下は研磨工程の苦心の後に滑石剥片および硬玉未成品等が多く含まれていた。本ビットには苦心の多いことが注目された。

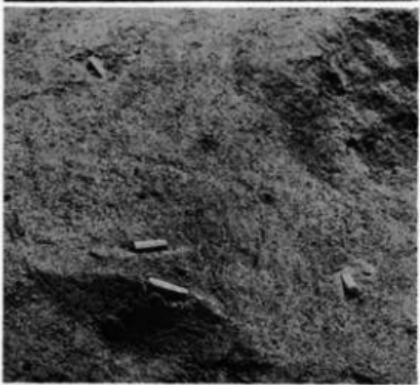
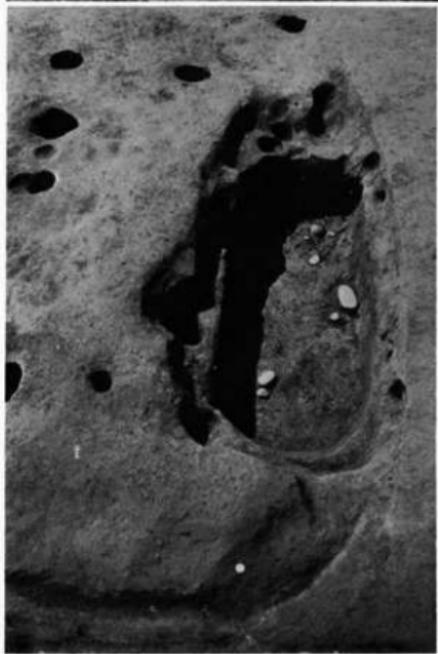
工房地内の出土遺物は、工作用第1・第2ビット中に最も多く、殊に床面上の建物は堅穴の東南部で多く検出され、工作用第1ビット南に接して剥片の群在、硬玉の集積が認められた。既述の平底石に用いられたであろう扁平石の存在も、これら建物の群在に接している点に意義が認められる。しかし、他の部分には全く認められないというのではなく、微細な剥片はほとんど堅穴内の全面から検出されているといつても過言ではない。工具も完形上器の検出はなかったが、T作業第1・第2ビットともに底部に検出され、かつ堅穴の東南部に破片を認めている。ただし、堅穴外に至ると遺物・剥片は全く検出することができなかった。また堅穴の外側は、かなり広い範囲に発掘したのであ

るが、遺物とともに遺構もまたこれを検出することができなかった。

さて、第1号址は以上の如くであるが、これらの観察を基として、失われた西壁を検出し、復原されたプランを考察してみたい。まず本址のプランであるが、東壁長5.25メートル、残存部約3/4と推定される南・北壁現長約3.8メートルおよび主柱穴と考えられるP1・P2・P3・P4の位置からみられる復原された本址のプランは、東壁長5.25メートル、西壁長5.15メートル、南壁長5.1メートル、北壁長5.15メートルの隅九方形に近い不整様式を呈するものと考えられる（隅丸であるため、壁長は直線的部分でなく、両壁に挟まれた最端部で壁長を算出した）。この理由について述べてみよう。

堅穴の各壁は前述した如く若干の調張りを呈している。東・南壁はゆるいカーブであるが、北壁のみがP1に近い張り出しを呈している。これは工作用第2ビットが存在することにもよるが、このため堅穴中央部の南北最大巾は5.48メートルとなり、南北壁の現行西端部での巾は5.3メートルとなり、東壁長の5.25メートルを優に上まわるものである。このデータのみからすれば、内壁が東壁より長く、西に広くプランを想定する誤りをおかすかもしれない。次に主柱穴の配置を観察する。まずP1・P2と北壁までの距離はいずれも1.15メートルであり、P1・P4と東壁までの距離は共に1.6メートルで、きわめて規則的と言える。柱穴間の間隔はP1・P2とP3・P4の間が共に2.12メートル、P1・P4が2.46メートル、P2・P3間が2.63メートルと差があり、P2・P3が開いているが、反対にP3・P4と南壁までの距離はP3が1.55メートル、P4が1.9メートルと逆の現象を呈している。しかし、P1・P4を結ぶ南北壁間の間隔は5.51メートル、P2・P3を結ぶ南北壁間の間隔は5.33メートルを算し、この柱穴線上での間隔からは東壁の開く形態をとっている。本堅穴が隅丸であるという点において、計測に決定点を求めることができないにせよ、この主柱穴の開き方からのみ観察すれば、東壁長=西壁長、北壁長=南壁長という結果を見ることができる。いまこれらの結果を用いて失われた西壁を求めるにすれば、P1・P4と東壁の距離およびP1・P2間、P4・P3間の間隔の規則性をP2・P3と西壁間の距離に該当させ、それぞれ1.6メートルを求めることができる。しかし、この数は堅穴の北壁上の計測値であるので、仮りに除去された壁高が存在するとして、また西に傾斜している床面の傾斜があることを予想するとすれば、堅穴の北壁下部からP1・P4に至る距離1.5メートルをP2・P3と西壁間の距離に仮定した西壁は工作用ビットを持

第4 第1工房址



工作用第2ピットと遺物出土状態（第1工房址）

たないのであるから、東・南壁と同様にゆるやかな直線に近いものと考えて誤りなからう。とすれば、現存北壁と南壁の延長線がこの西壁に接する点、それが西壁となる。

かくして、本址のプランは東壁長5.25メートル、西壁長5.15メートルで若干東壁が開き、北壁長5.15メートル、南壁長5.1メートルでは同じ反さの梯形を呈するプランに復原し得るものと考えている。遺物出土の広がりがこのプラン内であることも、これを証するものであろう。そしてこのプランは、過去にわれわれが経験してきた女工房のプランが、すべて梯形を呈していたということに一致している。そして梯形プランの下底部に工作用ピットの存在を認めているのである。ところで工作用第2ピットはどうであろうか。北・南壁長差0.05メートルを梯形とすれば、確かに下底部に工作用ピットが存在しているが、この差はあまりにも僅少であり、上記の仮定上から許容誤差0.05メートルは認めなければならない。とすれば本址のプランに関する限り木第2ピットは第1ピットに対して副次的ピットとしての意義を保有するものとみなされる。これは東壁に対して北壁が甚しい張り出しを有する点からも考え得るところである。ただし、副次的の意味はあくまでも本址構築の際のプラン上からの観察であり工作ピットとしての機能上からは、また別の考察がなされなければならない。

## 第2工房址

第2工房址は第1工房址の北側約10メートルに検出された。ただし、プランが不明のため相互の空間隔は算出できない。表上の流出が甚しく、堅は全く消失し床面も柱穴群のはば中央辺にわずかにそれらしきものと判断される程度の残存状態であった。ただ柱穴および工作用ピットの一部がわずかに破壊をまぬがれてい る。

柱穴は計26個検出されたが、すべて同一工房址に所属する柱穴か否かは断定できがない。主柱穴もやはり決定できない。柱穴群の西端近くに工作用ピットらしいものが検出され、またその東北80センチをへだてて長径1.25メートル、短径80センチの長方形の浅い溝を認めたが、その性格については詳らかにできなかつた。

工作用ピットは長径92センチ、最大巾80センチ、深さ約20センチのエプロン形を呈し、左右ほぼ対称にし

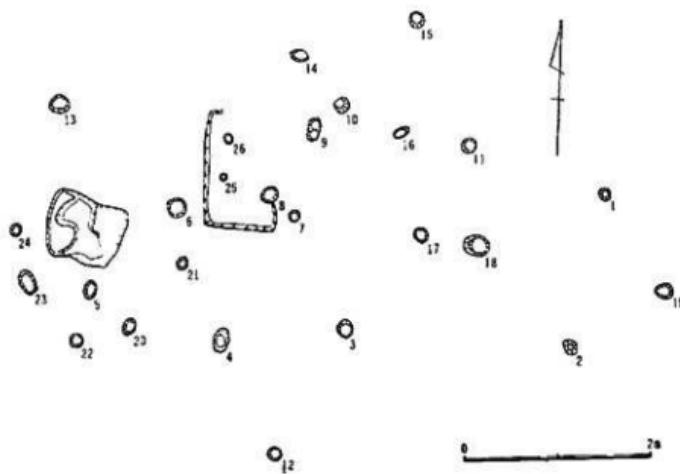
て有段のピットである。ピット内には硬玉および滑石小剥片が若干存在した。第1号址に比すればさわめて小さく、かつ剥片量も微々たるものである。しかし、上部が耕作のため削去され、流失しているので、原形はいま少し大きくなるものと思われる。このような形態の工作用ピットは第1号址の工作用第1ピットの変形として把握され、有段のものは千葉縣成田市八代工作跡跡にその例があるので、工作用特殊ピットとして誤りないものと考えている。なお、工作用ピット内出土遺物は、土器小片1、滑石剥片11（うち研磨痕のあるもの2）、硬玉片1種である。

遺物はほとんど土砂とともに流出し、傾斜にそい台地の西縁に集積していた。このため遺物の工房址内における存在状態は工房址プランとともに不明である。

（寺村光晴）

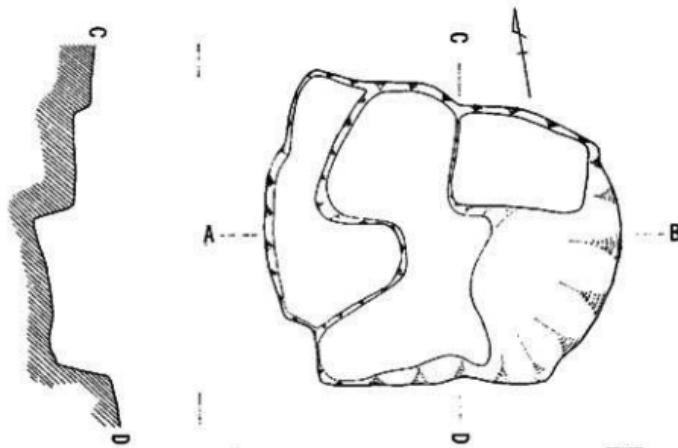
第4表 第2号址 柱穴計測表 (単位cm)

P №	長径	短径	深さ	備考
1	17	14	20	
2	16	13	11	
3	25	24	38	主柱穴か
4	26	20	33	主柱穴か、滑石片あり
5	22	20	21	土器片、滑石片あり
6	27	22	27	
7	16	16	18	土器片あり
8	28	24	28	土器片12個
9	32	24	北穴26 南穴21	底2穴
10	22	22	20	45度東に傾斜
11	21	20	30	
12	20	19	19	
13	20	19	32	
14	24	22	26	15度南に傾斜
15	24	23	19	
16	25	24	31	N Eに20度傾斜、土器片
17	20	18	21	
18	33	22	27	
19	25	25	12	
20	21	16	38	N Eに少し傾くほぼ垂直
21	19	19	11	
22	17	16	20	
23	27	17	15	
24	12.5	12	20	西に3度傾斜
25	16	15	14	
26	19	19	6	断面形は深い四角



第3図

第2工房址ピット配置図



第4図

第2工房址工作用ピット実測図

## 第4章 造物

第1次・第2次の調査ならびに調査前後における出土遺物は、玉類を中心としてきわめて多数である。しかし、すでに記された如く、第1工房址内出土の遺物が最も多く全量の過半数を占め、かつその存在状態が明瞭であるので、ここではそれを中心として記すことにする。故に特記のないかぎり第1工房址内出土の遺物であり、必要に応じて他を附加している。なお、出土遺物のすべては現在鶴見町宮崎小学校に保管してある。

### 1 玉類および未完成品

#### (1) 硬玉製玉類および未完成品(第5・6図)

出土の硬玉は原石(転石のままのもの)8、原石に打痕のあるもの9、打ち削られたものに打痕のあるもの13、研磨されたもの1が出土しているが、第1次調査においては総数110個が出土している。これらはほとんど勾玉に製作されたものと推察される。発掘時ににおいては定形の硬玉三切勾玉の出土をみなかつたが、最近勾玉形の未完成品も採集された。

原石はすべて転石を採取している。この転石は海岸漂石と思われる。宮崎海岸には現在も硬玉漂石が採取されるので、本遺跡のものも恐らくこの宮崎海岸採取のものと考えられる。大きさは5×8×8センチ(遺物番号N.75、以下同じ)が最大で、1.3×1.8×0.6センチ(N.38.1)が小さい方である。第6図10(N.5)はその一例で、全体に緑色斑文があり良質の硬玉である。

硬玉製玉類(この場合は勾玉)の製作工程は、ほぼ3種が認められる。私はこれを浜山技法、紙剝技法、横割技法と名付けて区分することとした。

#### (1) 浜山技法

先に八巻技法とも称したもので、俗にいう風化硬玉および原石を焼いて生じた石目(石の筋理)にそい八巻のような打痕をめぐらすものである。すなわち、この打痕にそい、石を剥離するもので、第5図1~5にその順序を示した。

八巻を施す場合はすべて石目にそい施している。1(N.168)・2(N.162)は転石の石目にそい打痕をめぐらしたもので、4(N.57・N.73・N.145)は剥離の状態を示している。この剥離の技術は定形化された技術と考えられ、同様剥離の未完成品が5(N.92)にも認められる。これは現在浜山玉作遺跡以外の場においては見ることができない硬玉の技法であるので、ここに浜山技法と称したい。

#### (2) 紙剝技法

第5図6~8に示したもので、石目にそって石の長径を削るものである。硬玉の筋理は平行ではなく

きわめて不定であるためにこの区分が生ずるものと考えてよい。7(N.12・N.163)は縱割後に横割したものか、横割後に縱割したものか判然としないが、この縱割技法も認められている。

#### (3) 橫割技法

石の筋理のうち横のものを選んで打撃を加えたものである。第5図9~11がそれで、9(N.74)・10は共に印打版を有し、八巻技法の後に打刻している。

以上の如き打割の結果生ずるものは不定三角形様の剥片となる。新潟県青森市寺地遺跡(縄文時代中・晩期)出土の硬玉三切にはかかる技法に類似するものを認めており、故にこれらの技法は浜山技法(八巻技法)を除き縄文時代以来の伝統的技法の系譜として把握できるものと考えてよからう。硬玉は碧玉と異なりその性質上未完成品に定形化されたものを認めないが、少なくとも上記技法の存在はこれを承認し得るものであると考えている。そして第5図12(N.84)に至って研磨が開始されたものとしてよからう。ただし、この場合は転石の表面(磨面)をそのまま使ったものかもしれない。硬玉の剥離(打割)は求める形態の作成とともに、良質の部分を残すというコア技法であることは多言を要しない。

次に硬玉平玉が1個出土している。第9図7(N.15)がそれで、研磨工程にあり、岩玉化している。特異な遺物としてよい。縦括面に掲げた硬玉は表面採集品であるが、唯一の勾玉形をしたものである。

#### (2) 玉種質未完成品(第6図)

先に青石製としたものである。すべて勾玉未完成品と思われる。第6図1~5はそれを示した。

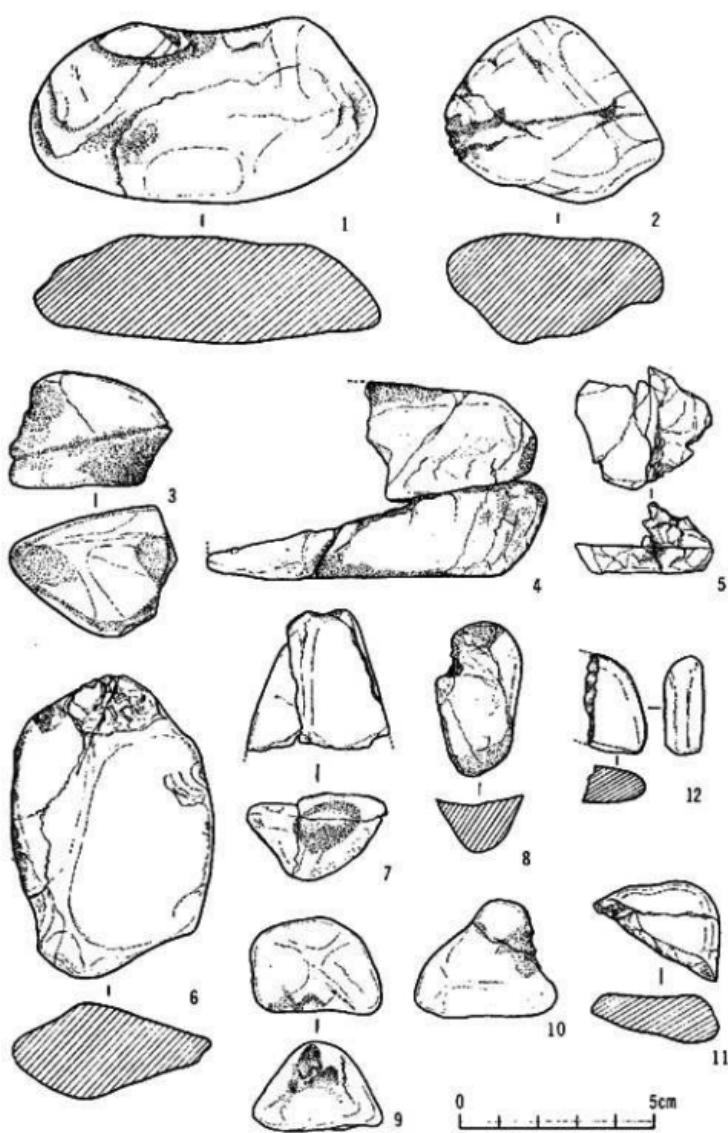
荒削および形割工程未完成品で、5(N.40)は転石にそのまま打撃を加えている。本未完成品は濃緑色の半透明で硬玉ときわめて近似しているが、石質が異なるため攻玉技術は碧玉に近い。從来古墳出土の硬玉製勾玉と報告されているもののなかには、恐らくこのような勾玉が誤って報告されているのではないかと予想される。

#### (3) 硬玉三切(第6図)

純絞岩質硬玉が若干出土している。第6図6(N.106)は転石をそのまま利用し、現長1.6センチである。他に1個(N.26)出土し、表面採集で6個採集されている。いずれも不定形である。

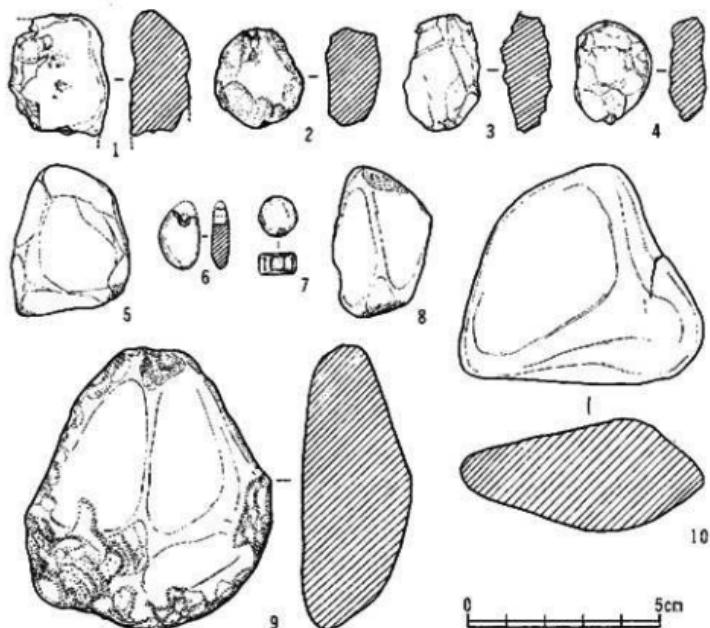
#### (4) 勾玉および未完成品(滑石質)(第7図)

以下滑石質と記すものは、岩石鉱物学上の分類による滑石も含まれるが、それに近いものが多く、すべてが緻密な意味での滑石でないことを了承されたい。

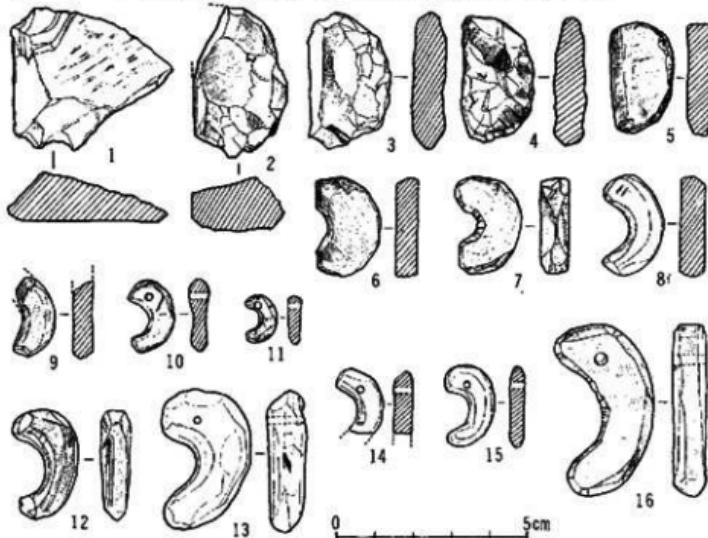


第 5 圖

經 玉 未 成 品



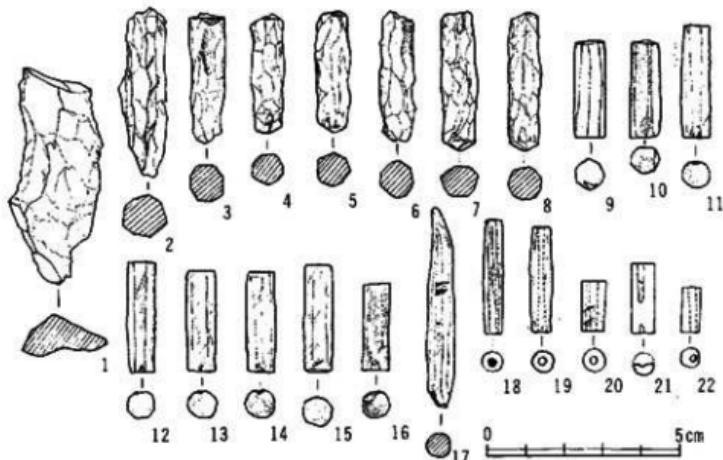
第6図 玉魏質未成品、蛇紋岩製玉、硬玉平玉未成品、硬玉叩石、硬玉耘石



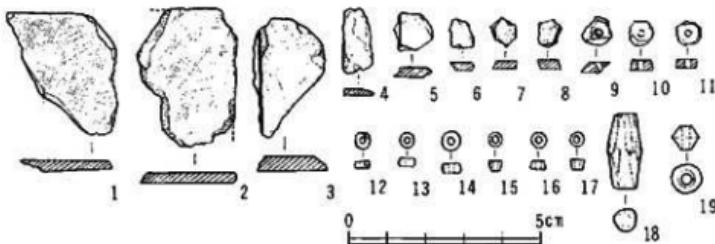
第7図 勾玉と勾玉未成品(滑石製)



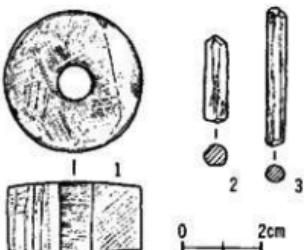
第5 硬玉原石及び未成品剥片 (左下より5段36)



第8図 管玉と管玉未成品（滑石製）



第9図 板状未成品、白玉及び未成品、玉玉、ソロバン玉未成品（滑石製）



第10図 コマと長状品

滑石質の玉類および未成品。剥片はきわめて多く、細裂片を数えれば數万点にのぼる。故にそのすべてを図示できないので、以下代表的のものを挙げた。

滑石製勾玉にはほぼ三種が認められる。A類は通常みられる勾玉であり、B類は扁平状の勾玉であり、C類は薄い板状勾玉である。その製作工程はC類勾玉の荒削未成品が板状未成品（後出）の中にも含まれ。形削未成品がこれより作出されるものもあり、かつ整形の工程に若干差を有する以外は、ほとんど同じ製作過程を経ているものと考えられる。第7図1～11はその過程を示したものである。

第7図1は荒削未成品で左端に底座を有している。2(Nr.184)は形削未成品で、切削面を有し、これは鉄器による切削と判断される。この過程においては勾玉の大体の形に近い多面体が構成されているので、碧玉質勾玉の製作工程に比すれば、側面打製の工程にも対比されるものである。3(Nr.103)・4(Nr.146)も同様である。5(Nr.76)は研磨が開始されたもの（研磨未成品）で、側縁の研磨方向は横である。全面に研磨が施されている。6(Nr.115)は勾玉内部の抜入を開始したもので、研磨による抜入ではなく切削である。7も同様である。ここに滑石製勾玉の製作技術が如実に示されている。8はほぼ整形されたもので、穿孔の際の鋸のブンを防ぐためか頭部に打痕があり、裏面にもそれが認められる。10(Nr.68)・11(Nr.197)は穿孔終了のものである。滑石質勾玉は最後の仕上げを実施しないものが各地より多く出土されているので、これで完成したものかもしれない。12～15は調査前採取のものであるが、整形の過程をよく示している。16(Nr.155)は大形で長さ4.5センチ、孔はいずれも一方向穿孔で、棒状錐を使用している。なお11・16はB類で、他はA類に属している。

##### (5) 管状および未成品（滑石質）（第8図）

管玉には通常みられる大きさのものと細形のもの2種がある。これをA類（2～16）、B類（17～22）とする。

A・B類は形削工程において若干の差がある。第8図2(Nr.62)と17(Nr.49)がそれで、2は部分的の切削により整形が行なわれているが、17は全面切削により整形されている。これは形の大小による違いかもしれない。2はさらに上部を打撃により打ち除いている。しかし、3(Nr.143)～8(Nr.192)になると、いずれも上・下端に施縫痕を有し、ここに打撃を加えて除去している。最大施縫痕はテコ状になされている。この技法は阪西技法そのままである。9(Nr.118)～16(Nr.158)は研磨未成品で、概ね7・8角柱を呈し、上・下端とも研磨されているが、中には円筒形に近いものもある。

研磨の方向はほとんど斜にある。ただ注意すべきは側面の一端にかかる凹痕を1個所付していることである。この凹痕はすでに側面切削（側面打製）未成品に出現しており（4・5・7・8等）、管玉製作上、遺物を固定するための用に供すべきものと判断される。穿孔はこの研磨未成品に施されるのであるが、検出未成品に関するかぎり、加賀技法の如き上・下面の凹痕を認めていない。このように側面の一端に小切痕を付すものは他に良好な資料を得てない。ここに管玉の浜山技法として、他と区別したい。ただ本遺跡では不幸にしてA類管玉の自後の工程にある未成品が検出されていない。B類管玉では穿孔未成品が出土している（18～21）が、これをみると一方向穿孔の16(Nr.137)、二方向穿孔の18(Nr.181)、21(Nr.128)などがあり、穿孔方向のクセは一定していない。21は孔内部にリング状擦痕が認められる。出土工作の報告にあるタタキ孔による穿孔は検出されていない。知見に限るかぎり他の遺跡においても古墳時代管玉の穿孔はすべて回転穿孔のようである。22(Nr.36)は光成品と思われる。長さ1.16センチ、径0.47センチ、孔径は2.5～1.6ミリである。

なお、本遺跡の管玉未成品は一端の径が若干細くなっている。これは形削未成品（例えば3・4）にすでに出現れているもので、浜山遺跡の技術上のクセ（特徴）と考えてよからう。

##### (6) 扁状未成品・口玉とその未成品（滑石質）

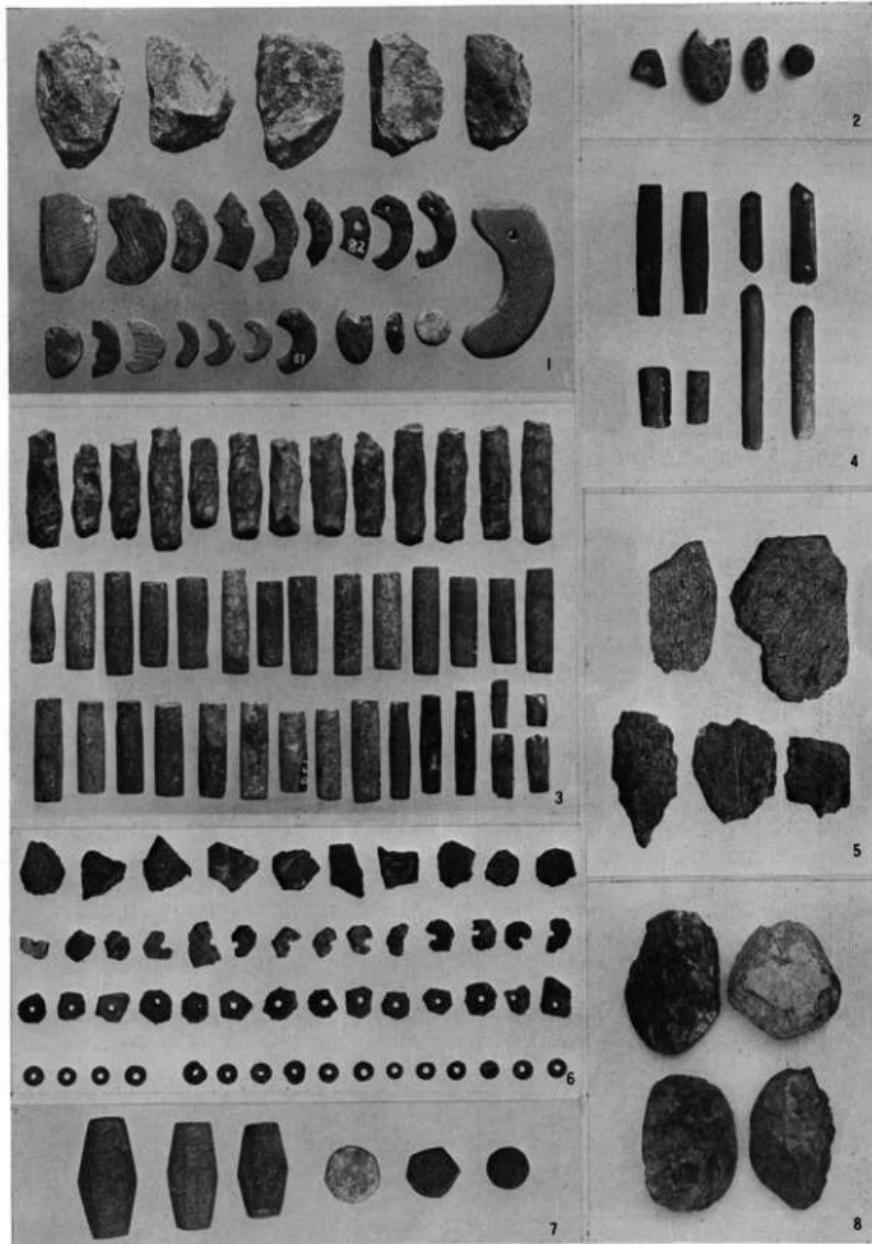
###### （第9図）

第9図1～3の如く厚さ2～3ミリの板状未成品がかなり出土した。いずれも側縁に切削痕や研磨痕を有し、表面とともに研磨が実施されている。これは次の白玉製作の素材と認めてよい。

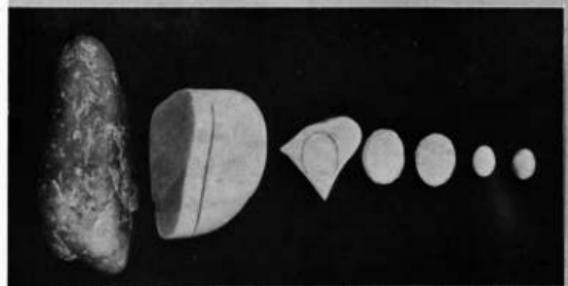
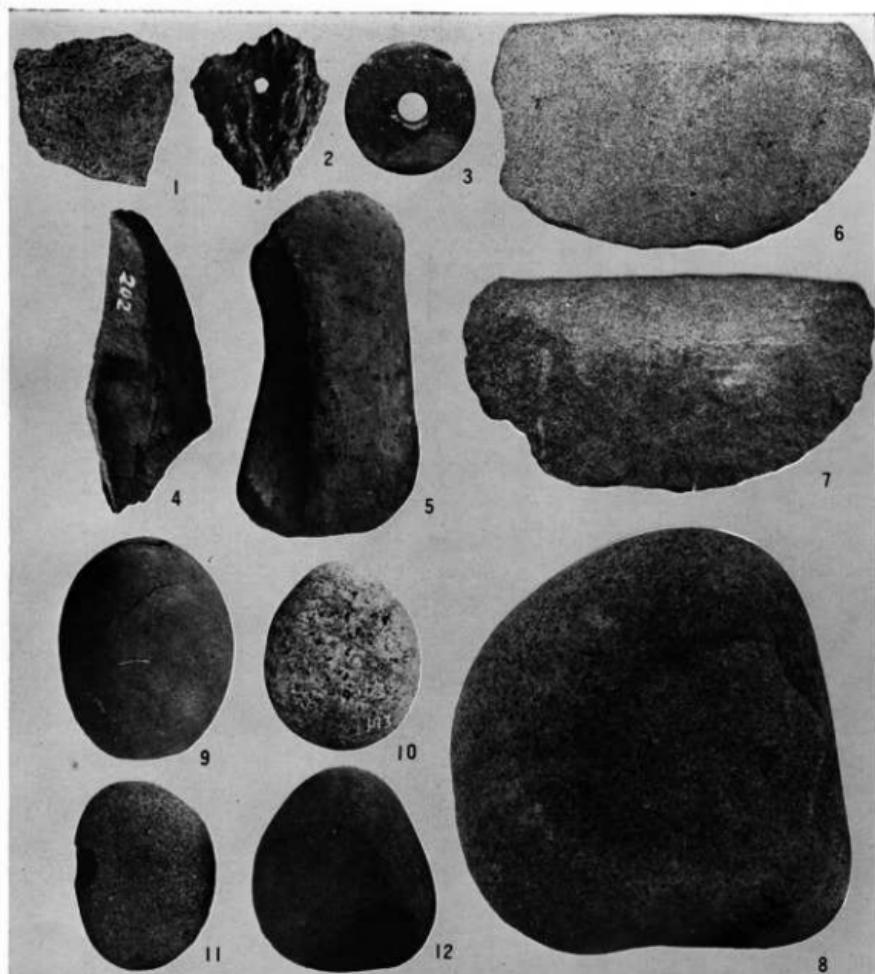
ただし、4の如く口玉以外の製品にも使用されている。5～8は臼玉の形削未成品、9～11は穿孔未成品、12～17は整形未成品と完成品である。第1工房の工作用第1ピット内からは形削未成品82、一孔のもの38、孔あり半穴のもの149、整形未成品および光成品は7、計276個が出土している。工作用第2ピットからは計144個が出土している。整形未成品には上・下面に技術上擦痕が残るが、完成品には見当らない。なお、臼玉の次正上注意されるのは鉄器を用いた打撃による切削で、形削未成品を作出するには4角から5・6角形に切削し、孔は一方向穿孔である。厚さには2.5ミリ前後と4.5ミリ前後の二種がある。

##### (7) 白玉未成品（滑石質）（第9図）

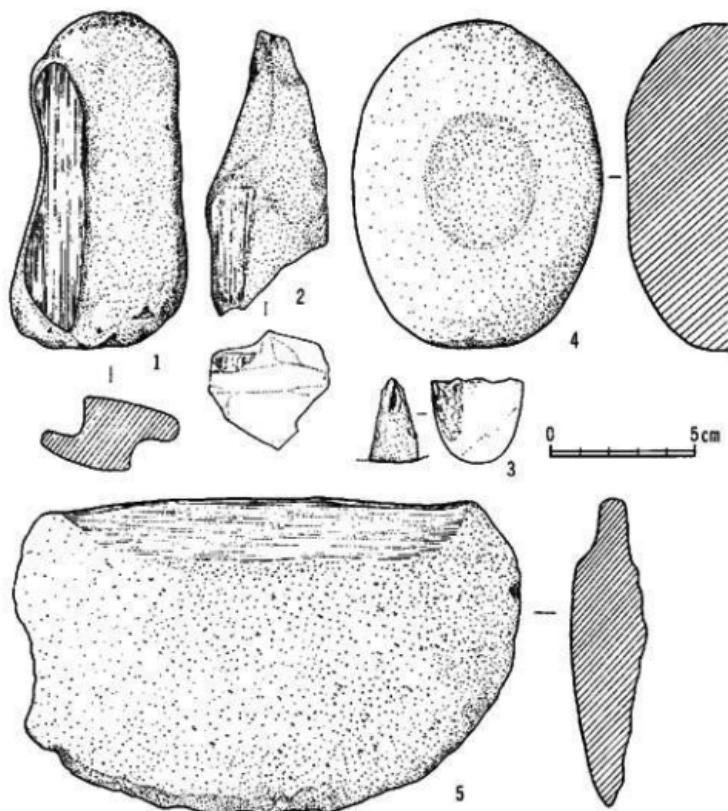
白玉の研磨未成品が第1次調査で3個出土している。いずれも穿孔直前のものである。最大は足さ2.2センチである。第9図18(Nr.22)は14面を有し、上面の一端に管玉に似た小凹痕を有している。これは他の



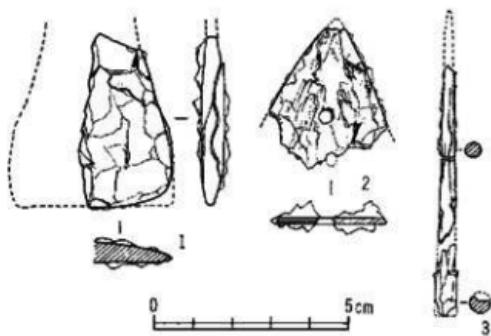
第6 出土の種類 勾玉、管玉、臼玉、箇玉、平玉、垂玉、棒状品、板状品の未成品 (31) (32・最下段のみ31)



第7 工作用工具類と現代の硬玉の攻玉 鉄製品、コマ、砥石、叩石、台石、下段は現在の硬玉加工の実際（水鳥清一氏）



第 11 図 石 器



第 12 図 鉄 製 品

未成品にも認められる。

#### (8) 算盤玉米未成品（滑石質）（第9図）

穿孔完了のもので、施痕が残っている。仕上げ直前のものか、径0.67センチ、厚さ0.61センチ、孔径0.2ミリである（No.212）。工作用第2ビットより出土している。

## 2 工 作 具

次玉用工具としてはコマ・砥石・叩石・台石および鉄製工具が出土しているが、鉄製工具は次項で記すことにする。

#### (1) コ マ（第10図）

第1次調査で1、第2次調査で1、計2個が出土している。第10図1は第1工房址出土のもので径3.5センチ、厚さ1.9センチの滑石質である。

これは所謂ハズミ式で縦の回転を円滑ならしめるためのものと推察される。表採品に鉛錠半1があったが、これもコマとしての使用が考えられる。出雲國工作遺跡では碧玉製のコマが出土している。

#### (2) 砥 石（第11図）

砥石は内磨・外磨ともに出土しているが、材質機能は明確でない。

外磨砥石は第11図1～3で、いずれも硬砂岩質で1枚から2枚のU字形構を有している。4（No.69）は上・下に打痕があり、一面中央を平滑にしてある。叩石とともに砥石の機能を示したものと推察される。5（No.19）は内磨砥石で、上縁が凸状にかつ特徴のある微波状縁を呈し、磨耗している。表採を加えて計4個出土しているが、いずれもほぼ同大・同形で定形化したものである。このような砥石は未だ他に類例を認知していないので本遺跡を特徴付けるものであるから、出雲國工作型内磨砥石に対して浜山型内磨砥石と称したい。なお、本砥石の未成品が近くから採集されている。大きさ形態とも同じであるが、上縁の整形は認められない。大形のフレイクを用いて製作したものである。

#### (3) 叩 石 と 台 石

第6図9は硬長の軽石をそのまま叩石に用いたもので、周縁に打痕があり特に下部が甚しい。このようなものがかなり出土している。第11図4も叩石に使用している。図版第7・9～12は硬玉以外の叩石の例を示した。同8は扁平な自然石の上面に小凹痕がある。台石にも利用したものと思われる。

## 3 鉄 製 品（第12図）

第12図2（No.31）が第1工房址より出土した。他は表採である。1はタガネの一種かと思われ、2は不明、3は推定全長6.3センチ、断面円形の棒状品で先端が尖っていたものと思われる。あるいは縦かタガネの一種であろうか。サビが多く詳細は判明していない。

## 4 その他の遺物

第10図2・3に示したものは滑石質の石墨状品である。縄文時代中期の遺跡からもこれと同様のものが出土地している。本遺物は明らかに古墳時代のものであるから、縄文時代の石墨状品とは異なり、攻玉に関係ある遺物と推察している。しかし、用途は不明といわざるを得ない。

他に第1工房址の工作用第2ビット中から紙糸および木粉が微量検出されている。また、採集石材小中には水晶片2、瑪瑙片2、鐵石英片1、石英片1、真岩片1等があり、ガラス小球1個も採集されているが、時期的な判別は詳らかでない。（寺村光晴）

註1) 寺木重孝・寺村光清編「寺地硬玉生産遺跡第1次調査概報」青海町教育委員会（昭44）

2) 勾玉の各部名称については諸説あるが、寺村光晴「古代玉作の研究」（昭41）166頁にある勾玉の名前を参照されたい。

3) 同 上

4) 大場善雄著「加賀片山洋玉造遺跡の研究」加賀市教育委員会（昭38）

5) 浜田耕作・島田貞彦・鶴原末治「出雲上代玉作遺物の研究」京都帝大文学部考古学研究報告第10冊（昭2）

## 5 土 器

浜山第1号出土より出土した土器は、器形を推定できるもの9点と、ほか破片若干にすぎない。

その出土状態も、特記すべきものではなく、わずかに堅穴の東方に偏した第1工作ビット中や、その周辺より検出された壺（図1）位のものである。また唯一の完好品である高杯脚部（図4）は、堅穴南壁面近くから出土した。

器形には、壺・蓋・高杯・盤・鉢がみられ、日常用器の一セッテを構成しているが、年代判定の系材としては十分ではない。

### 壺（図1）

いわゆる「く」の字形口縁をなすが、上端に面取りを施しているのが注意される。赤褐色で滑沢の良い土器である。

### 壺（図2）

ほぼ直立する、巾3.5センチの縁唇部がめぐら、いわゆる複合口縁の壺であって、褐色で滑沢良好なものである。

### 高杯（図3～6）

3は、杯底部とはど同様の、外反気味に外開きの苦しい上半部を接着した部位に、明瞭な縫がめぐらるものである。

脚部は二点あるが、5は心もち中ぶくれのする脚柱が、脚柱で急にひろがりつつ反転する。3のような杯部に、脚部を嵌入する技法をとっている。局部的に黒頭を生じた褐色を呈し、焼成など良好である。

脚部6は、なだらかな「八」の字状に開展するが、穿孔はみられない。褐色で内外に希薄な刷毛目調整痕をとどめる。

### 盤（図7～6）

図示した以外に四点を数え、計七点となり量的にも最も多い。

LJ縁がわずかに外反する、半球状の形態で統一されている。

7は赤褐色、特に内面は赤味が強く、滑沢の良好な土器である。内部底面に手底と思われる凹凸がある。

8・9ともに、前者よりやや大形となるが、器形は同一であって、褐色を呈し滑沢を有する。

### 鉢（図6）

心もち内反気味の逆梯形を呈する。赤褐色をおび、焼成不良である。

以上の他に、三点の資料がある。

11は、第1工作ビット内およびその周辺よりまとまって発掘されたものである。外面と内部底面に強く炭化物の付着を認める褐色の土器で、内外に強く条線が引かれる。器形は「く」の字形口縁の壺である。

12は、赤褐色の土器で、壺であろうか。

13は、褐色で滑沢のない、小形壺である。

以上解説を加えた木道跡の土器グループには、工房址出土上器の特性が認知しうるであろうか。

石川県加賀市片山津玉造遺跡では、工房址即工人の住居址であったと考えられているが、この1号址からも、土器量は少ないながら日常用器の一セットが認められており、わずかに盤の多さが注意される位である。したがって、これらの資料よりは、工房址即住居址であったとも言えよう。

しかし、この問題は、集落構造内部における工人の専従度の問題として、生活社会の根本にふれるものであり、今後の課題として残される。

さて、時期的なものはどうであろうか。

図1の壺・5の脚は、このグループ中では古い様相を示しているが、最多量の壺の形態や、高杯の縁が薄れているなど、吉岡氏による土師IV期頃に比定できるものであろう。

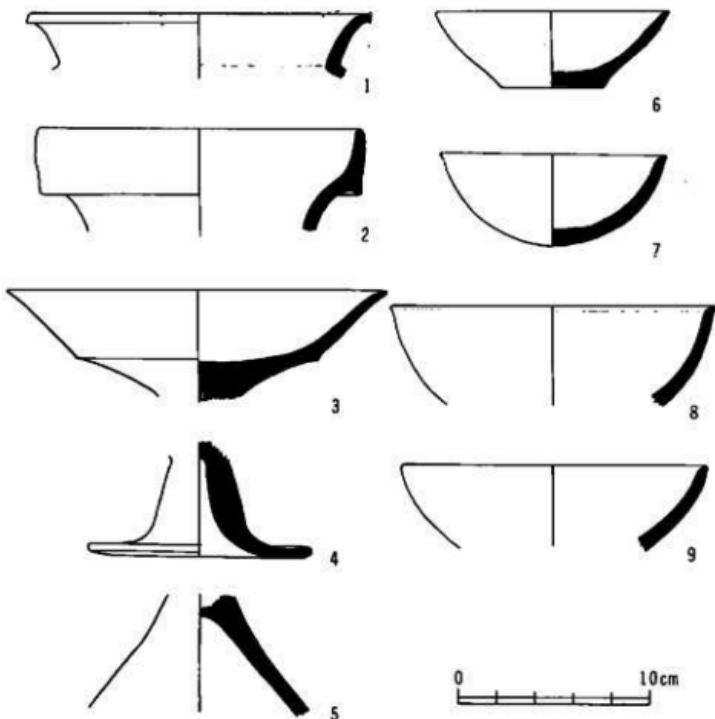
浜山1号工房址は、五世紀後葉と推定されることになる。

浜山2号址でも微量の土器片出土を見たが、特記すべきものもなく、時期的には1号址とほぼ同じ頃のものと見てよかろう。

（小島俊彰）

註1. 加賀市教育委員会大場幹雄他「加賀市片山津玉造遺跡の研究」（昭38）

2. 吉岡康暢「北陸における上部器の編年」『考古学ジャーナル』第6号



第 13 圖 土 壤 烟 測 図

第5表 出土遺物一覽表

硬玉 (ヒスイ)	玉髓質材						滑石		その他の石材				工作具			滑石												
	原石	勾玉	平	磨石	勾玉	垂玉	管	半板	曰	兼算	石墨	水メ	鐵石	頁岩	コ	内燃	外燃	叩合	鉄製品	計	原石その他							
原石その他	勾玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	品	ウ	英	岩	マ	磨石底	磨石底	石	石	石	その他							
玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	品	品	ウ	英	岩	マ	磨石底	磨石底	石	石	石	その他							
第1号址	116	0	0	1	68	0	3	22	76	2	44	372	3	1	6	0	0	0	0	1	2	3	5	1	1	727	多款	
第2号址	27	0	0	0	21	2	2	2	4	0	3	18	0	0	4	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	87	
表採	31	1	1	0	115	0	5	11	22	0	12	73	0	0	7	4	3	3	6	4	1	1	0	3	0	1	304	多款
計	174	1	1	1	204	2	9	35	102	2	59	464	3	1	17	4	3	3	6	4	3	4	3	10	1	2	1118	

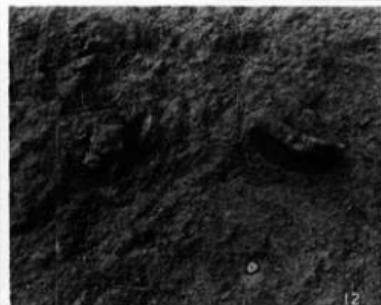
第8 土器および第2次調査遺物



下図は第2次調査の遺物と  
その出土状態 12~15  
1~9までははば原寸  
10叩石 11内磨砥石で2  
分の1になっている



1.2 硬玉未成品 3.4.5 滑石勾玉未成品 6.7 蛇紋岩勾玉 8.9 垂玉未成品



## 第5章 硬玉と石製品

### A 玉をつくっている鉱物

浜山で玉つくりに使用された原石の一部は第6表のようになっており、硬玉、透輝石、青長石、石英、蛇紋岩、滑石などである。

#### a. 硬玉 (ヒスイ)

Jade, Jadeiteは $\text{NaAl}(\text{SiO}_3)_2$ のアルカリ輝石類で单斜晶系。塊状、粒状、柱状、纖維状で硬度は6.5～7、比重3.33～3.35でガラス光沢を示し、透明～半透明で色は緑色、緑白色、白色、白色に輝緑色の斑点を示す。蛇紋岩中（長崎県、新潟県小瀬）、結晶片岩中（チベット）にあり、ビルマのように赤色結晶中に凹凸状に産出することもある。

浜山出土のヒスイは、あざやかなヒスイ色をしているものも多はあるが、薄い緑色と白色のものが多く半透明の白色ヒスイの部分に、わずかに緑色がはいっているのが普通である。硬くてガラスにきずをつけることができる。ほとんどが破片であるが、中には海沈

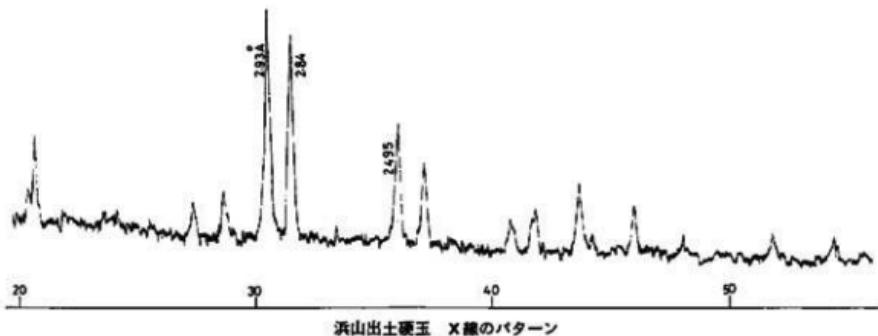
されて非常に丸くなつたのも出土する。

X線（条件、Kcu, time constant; 2, Scale factor; 8, 15mA, 30kv, filter; Ni, Slit; S1:1°, S2:2mm, S3:1°, 拡大:1, operation factor; 1）でその性質を調べると岡のように2.93Å（オングストローム）、2.84Å、2.495ÅのJadeiteとしての特徴的な線がでている。

また薄片にして光学的性質を調べると、干涉色は石英や長石類のように低次を示すが、水晶の入り方等でそれらと十分に区別される。

以上の色、光沢、透明度、硬度、X線、光学的性質などから浜山でヒスイを出土することは確実である。

\* この項について國立科学博物館今吉氏、地質調査所大塚寅雄博士、富山大学相馬恒雄博士にいろいろご教示を得た、これらの方々に厚くお礼申しあげます。



#### b. 青長石 (Albite)

青長石の一種で $\text{Na}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ からなり灰長石 $\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ と固溶体をなしておらず、三斜晶系で青長石式双晶をするのが普通である。硬度6～6.5、比重2.60～2.62でガラス光沢を示し普通白色である。

浜山出土のものは一見乳白色で、火薬石のように小結晶があつまってザラメのようになっているものもある。

#### c. 透輝石 (Diopside)

輝石の一種で $\text{CaMg}(\text{SiO}_4)_2$ の結晶からなり白色、荷黄色、灰白色、淡緑色、暗緑色、黒色、時に透明で無色となり、稀に清青色である。單斜晶系、柱状で硬

度5～6、比重3.2～3.6である。ヒスイと固溶体をつくり区別しにくいが、堅さで区別される。

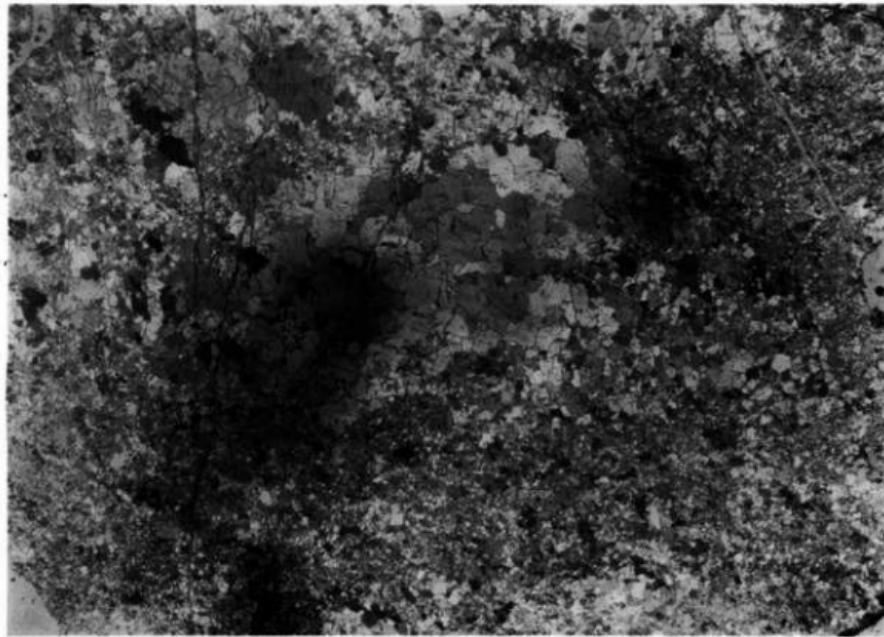
#### d. 蛇紋石 (Serpentine)

$\text{Mg}_3\text{Si}_2\text{O}_5(\text{OH})_4$  単斜晶系で纖維状結晶で、断面観察状で、触感なめらかで、硬度2.5～4、比重2.50～2.65、樹脂光沢で暗緑色、黄緑色、黒色半透明である。かんらん石が分解してできる。

浜山出土のものはいずれも破片で、硬度はかなり高く、淡緑色を示し纖維状なのが特徴である。

#### e. 滑石 (Talc)

$\text{Mg}_3\text{Si}_4\text{O}_{10}(\text{OH})_2$  単斜晶系で三角板状結晶でいくぶん柔軟性がある。硬度1、比重2.7～2.8で触感なめらかで劈開面には真珠光沢あり、緑・淡緑・白色など



浜山出土硬玉の顕微鏡写真（クロスニコル×20）

がある。

浜山出土のものは緑黒色、半透明の暗色、石英ある  
いは細要母の小結晶の集合したもののようにキラキラ  
光るものがあり、いずれも硬度は1よりやや高くかな  
り質のよいものが多い。

f. 石 芙 (Quartf)

$\text{SiO}_2$  六方晶系で、硬度7、比重2.65で白色・無色  
透明である。

浜山出土のものは乳白色で小結晶の集まつたもので  
ある。

■ 研 磨 材

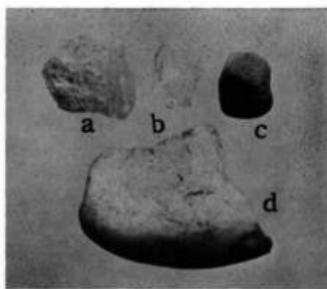
研磨材としては砥石にあたるものと砥粉にあたるも  
のの2つが考えられる。

a. 砥石に相当するものについて

大きい自然石を打かいた破片や原石でそれで本当に  
砥石として使用されたものもあるが不明のものもあ



浜山でのヒサイ等出土状態



浜山出土の海岸漂石  
a, b:玉ずい c:石英 d:ヒサイ

る。岩種として砂岩、玄武岩、石英斑岩がある。

#### a-1 砂 岩

灰色無砂岩、同種の砂岩の風化したもの、細粒まじり粗砂岩

これらの岩石は浜山の近くには露出しないで境川以西に分布する来馬層の岩石と思われる。いずれも断片であって何につかれたかわからないが荒砥のような役に立つものと思われる。明らかに荒砥として使われたものもある。

#### a-2 玄 武 岩

一見細粒砂岩のように思われる。目の細かな緻密な岩石で、砂岩と同様な役割が考えられる。

#### a-3 石 実 斑 岩

白黄色3mm~数mmの石英の斑晶をもった岩石の断片であるため何に使用されたか用途は不明で、漫流帶紋岩である。

b、砥の粉に相当するものについて下記のべるものについては産状が明らかでないので単なる土壤か砥の粉か不明である。

#### b-1 浜山分資(2) 第1工作用ピット

白味のつよい黄土色の細粉シルトで、かたまっていろいろな粒径になっている。上層の風化したもののように思われる。

#### b-2 浜山分資(1) 4.25%138、第2工作用ピット

赤味がかった黄土色の細シルト(土壤)に赤味のつよいいたいしゃ色の細シルトが含まれている。これがベニガラであるか、土の上でもものをやした後の酸化した土壤であるかは木炭などとの関係をみればすぐわかることがある。もしベニガラとすればどこからもってきたかの問題がかかる。

#### c 浜山近くの硬玉(ヒスイ)産地

浜山のヒスイがどこからもたらされてきたかはたいへん興味深い問題である。近くのよく知られているヒスイの産地は新潟県の小瀬、平岡である。この付近のヒスイの産地をくわしく調べている国立科学博物館の今吉は小瀬の他に白鳥山の山麓海抜1000m付近、真砂、小瀬の奥、野口、平岡の東(以上新潟県)、南小谷(長野県)、朝日岳南西斜面(富山県)黒部川流域をあげている。

また、茅原(1960)は小瀬、平岡付近のヒスイについて詳細な研究をしており、青海、小瀬地方における硬玉の産地と地質構造との関係について、次のように述べている。

「硬玉はアルビタイトに伴って産し、特にその外縁部に発達するのが普通である。アルビタイトは本地域の蛇紋岩体の中に広く点在している。しかし硬玉を伴うアルビタイト岩塊は全般的に存在することなく、

限られた部分にのみ発見されている。

含硬玉アルビタイトを包蔵する蛇紋岩体は主に次の三岩体である。

- 青海結晶片岩の西縁に沿って発達する蛇紋岩体
- 黒蛭—明見石灰岩体西側に発達する蛇紋岩体
- 小瀬地方中央蛇紋岩体の北半部

したがって、含硬玉アルビタイトおよび硬玉岩は、結晶片岩地域周辺部および古生層石灰岩体の西縁および南縁地域に主として産する」とのべてあり、ヒスイについての詳細な鉱物学的性質を調べている。

ヒスイ、透輝石、鉱石、青長石の共生関係については沼城(1965)は次のように述べている。「ヒスイ輝石は藍閃石片岩相の広域変成作用で生ずる鉱物で、いろいろな化学組成の岩石に出現する。石英と伴うこともあり、伴わないこともある。またヒスイ輝石はその種の広域変成地域にある蛇紋岩体のなかに脈状あるいは塊状をなして出現することもある。ヒスイ輝石は比較的低温高正で安定な鉱物で、ことに石英と伴なうときには、生成に高い圧力を必要とする。温度が高くなるか圧力が低くなると



の反応がおこりアルバイトとネフエリンになる。ヒスイ輝石が単独に存在する場合には、それは常温1気圧で安定でないとしても、その生成に要する圧力は大したものでない。それが透輝石やエジリントン固溶体をつくるときには、もっと低い圧力まで安定であろう。しかし、それらが岩石に出現する場合には、共存する鉱物の種類によって生成する条件の範囲が違っているであろう。」

また、「藍閃石片岩に伴う結晶片岩のものは、かなり多くのヒスイ輝石成分を含むことがあるが、そうでない変成岩のものはヒスイ輝石成分をほとんど含まない」とのべている。浜山遺跡出土のヒスイで加工していない原石をみると硬度7であるにもかかわらず、非常によく水磨されている。このことは結局原産地から流水の作用でながされてきたことになり、距離が近いのにかかわらずよく水磨されていることは波の作用をうけたことを意味し、現在宮崎の海岸で、土地の人方がヒスイをひろうように拾われたものが多いと考えられる。ヒスイと同じく加工される原石も青長石、透輝石、蛇紋岩、滑石などで、これらはすべて蛇紋岩や青長岩に伴なって産出する岩石で、これらの原産地はヒスイと同じ所と考えてよからう。

(藤井昭二)

## 参考文献

茅原一也 (1960) 新潟県青海、小滝地方の硬玉(翡翠)  
新潟県文化財調査報告書 第6

石井清彦 (1937) 7.5万分の1白馬岳図幅と説明書 地質調査所  
都城秋穂 (1965) 变成岩と变成帯 岩波書店

第6表

浜山分資表

浜山分資	N <sub>o</sub> 4	原石	1	ヒスイ, 透輝石
" "	" 5	"	1	ヒスイ
" "	" 6	"	1	ヒスイ
" "	" 7	"	3	蛇紋石
" "	" 8	"	1	玄武岩
" "	" 9	"	1	石英岩
" "	" 10	"	1	砂岩
" "	" 11	"	1	石英斑岩
" "	" 12	"	1	砂岩
" "	" 13	"	1	砂岩
" "	" 14	"	1	滑石
" "	" 15	"	1	滑石
" "	" 16	"	1	滑石
" "	" 17	"	1	滑石
" "	" 18			木炭
" "	(1) N <sub>o</sub> 138	第2工作用ピット内		細粉シルト(赤色)
" "	(2)	第1工作用ピット内		細シルト(白色)
" "	(3) N <sub>o</sub> 167	第2工作用ピット内		



両越国境の海岸回廊に迫る山なみ

&lt;十三夜浜山遺跡ううすと 素十&gt;

## 第6章 総括

浜山玉作遺跡の調査と若干の考察は、前章までで諸氏により記されたのであるが、最後にこれを一括して、調査の成果と問題点を略記したい。

第一に、浜山玉作遺跡は滑石とともに硬玉を採取し加工製作した遺跡であることが判明した。これにより古墳時代硬玉の国内生産が初めて証されたのである。

第二に、古墳時代硬玉の攻玉技術が初めて解明された。すなわち、われわれが浜山技法と名付けた技法である。そして本遺跡で製作された硬玉製勾玉が各地に拡散して行ったことは十分推察し得るものであり、各地古墳出土の硬玉製勾玉との対比において、きわめて興味ある問題を提供するものと考えられる。

第三に、滑石製勾玉や管玉・臼玉等の玉類と共に製作していることである。中でも滑石製管玉の攻玉技術は、管玉の浜山技法とも称すべき特色を有し、工具においても浜山型内磨砥石等特徴あるものがみられる。

第四に、プランがほぼ判明した第1工房址と、不明ではあるが存在の確実な第2工房址と、二個の工房址を発掘した。他に一個が予想される。また、近接した東側台地においても未完成品が出土しているので、ここにも工房址の存在が予想される。浜山台地における工房址集落の一端を知ることができたのは、生産集落研究上、一つの知見を加えたものである。ただ残念なこ



力強く鉤を入れる大場磐雄博士

とは、第1号址が五世紀後葉と推定され、第2号址もほぼ同じ頃と推定されながら、両者が同時的存在であるのか、あるいは若干の差があるのか判明しない点である。数量は別として両者間の遺物上に差を認めないという所見からすれば、たとえ差があったとしても、そうへだたりのあるものではあるまい。同時的存在とすれば、これも問題として興味がある。

最後に本玉作遺跡は、ここに玉作の専業集団が存在していたものと考えてよい。そして、この玉作集団を掌握したものが如何なるものであるかが問題となる。本地には顯著な古墳が検出されていない。最も近いのは桜谷古墳であるが、これは石剣等の石製品が出土していく時期的に合致しない。その上前方後円墳を含む古墳群は富山県でも西部に位置し、県北端に位置する本遺跡とは距離的に関連性を強調できがたい。また、文献上も玉作関係の記事が見当らない。とすれば、本玉作の隸属性態はきわめて興味ある問題を考古学・古代史上に提起して来る。これは玉作集団の発生と展開の問題、硬玉製造物の生産と拡散の問題等とともに検討されなければならないところである。しかし、これらの問題はいずれこの報告を基礎として種々検討されるであろう。

以上、成果と問題点を提示した。他にも言及すべき所が多いが、本書では素材を供し、自後の論及への前提としたい。

(大場磐雄)



硬玉（ヒスイ）勾玉未完成  
全面は研磨で整形してあった。  
緑の色は黒く写っている  
(全長 1.81cm 厚さ 0.61cm)



浜山遺跡第1次調査関係者：1967. 4.22

### 浜山遺跡関係者

#### 浜山遺跡調査会

顧 問 委 員 会 長	吉田 実, 鹿熊 安正
副 委 員 会 長	中川 雅一
事務局長	金井 恵治, 鹿熊 久一
事務局次長	酒井 栄, 松倉 健三, 渡辺 秋男
総務部長	上沢 源次, 上島 荘作, 関田 耕作
底務部長	眉谷 隆二, 竹内益太郎 (大浜豊治)
会計部長	大森 覚一, 在田 純芳, 眉谷九左二門
調査器材部長	奥田 清, 九里 道守, 水島 源藏
宿舎部長	野田 隆俊, 野島 二郎, 大曾 連二
本部長	大田 弘, 柳沢 浩
副本部長	小川 弥一
本部付委員長	森 群平, 赤川 重次
総務部付委員長	藤田 優宏, 水島 徳寿, 松原 義昌
会計部付委員長	野村 久四, 折谷 要
調査器材部付委員長	中村 勝恵
宿舎部付委員長	竹内 後一

#### 第1次調査団本部

本部長	中川 雅一
副本部長	眉谷九左二門, 小川 弥一
本部付委員長	眉谷 隆二, 九里 道守
総務部付委員長	奥田 清, 藤田 優宏
会計部付委員長	野村 久四, 松原 義昌, 折谷 要
調査器材部付委員長	大平 一衛
宿舎部付委員長	野田 隆俊, 水島 源藏, 水島ひろえ
本部長	荒井 静子, 眉谷 房子
副本部長	永井 文子, 宮内きくえ, 宮川 幹枝
本部付委員長	広川 時枝

水島 佳子  
眉谷 ハナ, 宮内きくえ, 宮川 幹枝  
第2次調査団本部

本部長	中川 雅一
副本部長	眉谷九左二門, 小川 弥一
本部付委員長	眉谷 隆二, 大浜 豊二, 九里 道守
総務部付委員長	奥田 清, 藤田 優宏
会計部付委員長	野村 久四, 松原 義昌, 折谷 要
調査器材部付委員長	大平 一衛
宿舎部付委員長	野田 隆俊, 水島 源藏, 水島ひろえ
本部長	荒井 静子, 眉谷 房子
副本部長	永井 文子, 宮内きくえ, 宮川 幹枝
本部付委員長	広川 時枝
調査協力者	(地主) 前川 信, 嘉義新右二門 (宿舎) 眉谷 要, 米田 実 (調査) 八木 キヨ, 加藤 与幸 水島 清一

#### 郷土の遺跡を語る会

(会長)	川上 嘉一
(副会長)	沢田 義一
(書記)	加藤 善治
(会計)	大浜 善雄
(監査)	折谷 隆一, 寺田 啓次 竹内 武治, 川久保吉太郎, 野田 貴実 九里 道守, 口岩 優治, 小林 俊一 長井直之助, 奥田 清, 竹内 俊一



浜山遺跡第2次調査関係者：1968. 8.10

## はまやま

宮崎小学校1年 加藤 真彦

ぼくはせんせいとはまやまへいきました。だいがくのがくせいさんがいしょくこてやたけのへらでつちをはってどきをさがしておられました。むかしのひとのいたいえはきれいにされたはしらのあなたがあるのでわかりました。やぐらの上やしたではしゃしんをうつしていました。

どきやひすいがみつかったらビニロンのふくろにいれてなまえをかいていました。おとこのひとがはまきをしていました。あせをながしてかおにつちをつけてあなのなかでつちをはっていました。どきやひすいのでたあなにまたどきやひすいをいれてしゃしんでうつしているひともいます。6年生のひとはざるにつちをいれそうじろみやのかわであらっています。小さいたまがたくさんみつかりました。

はまやまでいろいろわかりました。

## 浜山の遺跡

宮崎小学校4年 扇谷 万紀子

きょ年につづいて調査された浜山には、今から約1,500年前にあったという、古ふん時代の家のあとが二けんも見つかった。

そのころの住いは、土をはってつくった、たて穴式の家だったので、はくつした地面の中から、柱のたてであつた穴が、一けんごとに20本近くも見つかった。

まが玉や、いろいろな形をした玉が、どんどん出てきた。深さが60cm位もある、大きい穴や、たらいのような穴もほり出されました。「そこは昔の人が水をため、石を割ったり、砥石で磨いて、美しいまが玉をつくっていた場所だろう」と先生が教えて下さった。今の家にすると、その穴はちょうど、流しか仕事場にあたるところだと思います。

まが玉の内がわを磨く平たい砥石や、外がわを磨いたため、すじのできた石。石をわるための鉄の板も見つかった。

昔の人は、いろいろなものを発明し、工夫して品物をつくり、暮らしをよくしようとしていたのだな、と感心しました。

宮崎で一番の自慢は、美しい緑のヒスイで作られた、まが玉をつくっていた「まが玉のふるさと」とも言える、浜山の玉つくり遺跡です。私はこの大切な遺跡をいつまでもまもり、いろいろなことを勉強していきたいと思います。



勾玉に菅玉に春風の吹く 一芝



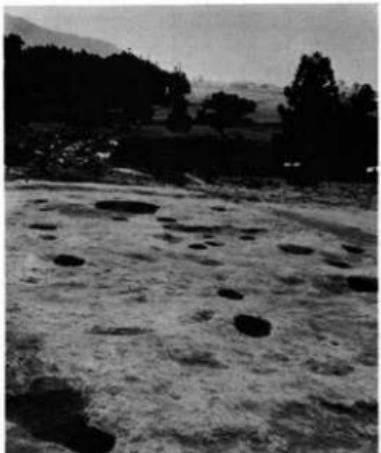
発掘の人に木蔭の遠かりし 十字



夏川にいろいろ玉洗い上ぐ 巨業



2号址で寺村主任より学ぶ子供たち



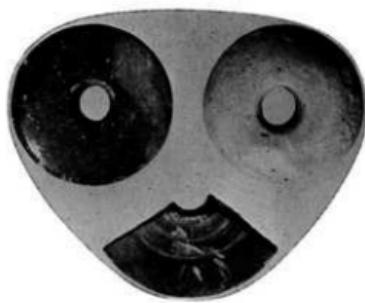
浜山2号址  
原野に勾玉や管玉の出づ 比呂志

#### 浜山玉作遺跡開発報文

- ・大場馨雄・寺村光晴・竹内俊一  
「越中宮崎浜山の硬玉工房址」  
日本考古学協会昭和42年度大会研究発表、於関西大学  
昭和42年10月
- ・「浜山玉作遺跡発掘調査速報」浜山遺跡調査団、宮崎小学校  
昭和42年5月
- ・浜山玉作遺跡調査団「ヒスイの工房址—富山県下新川郡朝日町宮崎浜山玉作遺跡—」考古学ジャーナル  
昭和42年7月号
- ・竹内俊一「勾玉の故郷—富山県朝日町宮崎浜山玉作遺跡第一次発掘調査から」富山県郷土文化講座  
昭和42年7月
- ・「越中宮崎浜山遺跡第2次調査速報—が玉のふるさと 浜山と子供たち—」浜山遺跡調査団、宮崎小学校・郷土の遺跡を語る会  
昭和43年9月
- ・次の本や雑誌の中に浜山玉作遺跡が紹介されている。
  - ・寺村光晴『翡翠—日本のヒスイとその謎を探る—』  
義神書院(¥450) 昭和43年4月刊
  - ・升崎宗雄「浜山遺跡に取り組む」教育技術小三  
昭和43年2月号(¥160) 小学館刊
  - ・竹内一芝編俳句全誌「夏野」(128号)  
富山不二越 那智俳句会
  - ・寺村光晴、竹内俊一編  
『浜山玉作遺跡第1次調査概要』朝日町 昭和43年7月



鎌入式で斬る中川朝日町長



浜山出土の筋廻車三種

昭和44年2月25日印刷 昭和44年3月15日発行  
勾玉の故郷 はまやま 監修 大場繁雄 編集 竹内俊一  
発行 富山県教育委員会・朝日町教育委員会 印刷 スガキ印刷工業株式会社  
表紙題字 吉田 実